昭和副讀本 巻三

4a
810
昭6

41703
教科書文庫
4
810
41-1931
20000
90688

昭和六年一月三十日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

昭和副讀本

保科孝一編

広島大学
教
90688
図書

育英書院發行

資料室
4a
810
B66

昭和副讀本　巻三目次

夏目漱石
一　京に着ける夕……一
二　二百十日（自修文）……一五
千家元麿
一　無題……三九
二　朝飯……四〇
尾崎紅葉
一　鹽原……四二
坪内逍遙
一　桐一葉……四九

野口米次郎
一　松の木……六八
森鷗外
一　木精……八三
二　扣鈕……九四
三　高瀨川（自修文）……九七
永井荷風
一　秋のちまた……一〇九
佐藤春夫
一　故國晩秋の歌……一二五
高山樗牛
一　清見寺の鐘聲……一二七

德富蘇峰
一　風雅論……一三四
二　國民的自力主義……一四二

昭和副讀本　卷三

夏目漱石

名は金之助と言ひ、慶應三年一月江戸牛込に生れた。東京帝國大學英文科を卒業して英國に留學したが、歸朝後帝國大學講師となり、後東京朝日新聞社に入社した。著書に評論、小說、隨筆の多くがある。英文學者としても著名である。大正五年歿す、年五十。

一　京に着ける夕

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貫いて、行くわれを七條のプラットフォームの上に振落す。余が踵の、堅き叩きに

七條　今京都驛といふ、京都市の南部にある

眞葛　京都市の東部祇園のほとり

賀茂　鴨川、京都市の東部を貫いて流れる

比叡　京都市の東北方に聳える山延暦寺がある

愛宕　京都府葛野郡の西境の山、頂に愛宕神社がある

鞍馬　京都府愛宕郡にある、京都の北一一粁、鞍馬寺がある

薄寒く響いた時、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をぱつと吐いて暗い國へ轟と去つた。

唯さへ京は淋しい所である。原に眞葛、川に賀茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことゞく昔のまゝの原と川と山である。昔のまゝの原と川と山の間にある一條、二條、三條をつくして、九條に至つても十條に至つても、皆昔のまゝである。數へて百條に至り、生きて千年に至るとも、京は依然として淋しからう。此の寂しい京を、春寒の宵に、疾く走る汽車から會釋なく振落された余は、寂しいながら寒いながら通らねばならぬ。南から北へ——町が盡きて、家が盡きて、燈が盡きる北の果まで通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後から云ふ。「遠いぜ」と居士が前から云ふ。余は中の車に乗つてふるへてゐる。東京を立つ時は、日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。昨日まではすれ合ふ身體から火花が出て、むく〳〵と血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて總身ににじみ出はせぬかと感じた。東京はさほどに烈しい所である。此の刺戟の強い都を去つて、突然と太古の京へ飛下りた余

夏目漱石

三伏 極暑の候のこと、夏至の後立秋までの暑い時期

は、恰も三伏の日に照りつけられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ落ちこんだ様なものだ。余はしゆつといふ音と共に、倏忽（シユクコツ）とわれを去る熱氣が、靜なる京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。

「遠いよ」と云つた人の車と「遠いぜ」と云つた人の車と、顫へて居る余の車は、長き轅（カヂ）を長く（あエ）連ねて、狹く細い路を北へ〳〵と行く。靜な夜を、聞かざるかと輪を鳴らして行く。鳴る音は狹き路を左右に遮られて、高く空に響く。かんからゝん、かんからゝんと云ふ。石に逢へばかゝん、かゝんと云ふ。陰氣な音ではない。然し寒い響である。風は北から吹く。細い路を窮屈に兩側から仕切る家は悉く黑い。戸は殘り

なく鎖されてゐる。所々の軒下に大きな小田原提灯が見える。赤くぜんざいと書いてある。人氣のない軒下にぜんざいは、抑、何を待ちつゝ赤く染まつて居るのかしらん。春寒の夜を深み、賀茂川の水さへ死ぬ頃を見計らつて大宮人の亡魂でも食ひに來る氣かも知れぬ。

一體いつごろからぜんざいが軒下に赤く染抜かれてゐたかは、わかり易からぬ歴史上の疑問である。然し赤いぜんざいと京都とは到底離されない。離されない以上は千年の歴史を有するぜんざいが無くてはならぬ。ぜんざいを召し給へる大宮人の昔はしらず、余とぜんざいと京都とは有史以前から深い因縁で結びつけられてゐる。始めて京

正岡子規（名は常規、俳人、明治三十五年歿、年三十六）

都に來たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一緒であつた。麩屋町の柊屋とか云ふ家へ着いて、子規と共に京都の夜を見物に出たとき、始めて余の目に映つたのは、此の赤いぜんざいの大提灯である。此の大提灯を見て、余は何故か是が京都だなと感じたぎり、明治四十年の今日に至るまで決して動かない。ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは、余が當時に受けた第一印象で又最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだに、ぜんざいを食つた事がない。實はぜんざいの何物たるかをさへ辨へぬ。汁粉であるか煮小豆であるか、眼前に髣髴する材料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稻妻の迅か

なる閃きのうちに思ひ出す。同時に――あゝ子規は死んでしまつた。絲瓜の如く干枯びて死んでしまつた。――提灯は未だに暗い軒下にぶら〳〵してゐる。余は寒い首を縮めて京都を南から北へ拔ける。

車はかんからゝんと鳴りわたつて、しきりに駈ける。前なる居士は默つて乘つて居る。後なる主人も言葉をかける氣色がない。車夫は只細長い通りを何處までもかんからかんと北へ走る。成程遠い程風に當らねばならぬ。駈ける程顫へねばならぬ。余の膝掛と洋傘とは、余が汽車から振落されたとき、居士が拾つてしまつた。洋傘は拾はれても雨が降らねばいらぬ。此の寒いのに膝掛を拾はれては、

東京を出るとき二十二圓五十錢を奮發した甲斐がない。子規と來たときは斯様に寒くはなかつた。子規はセル、余はフランネルの制服を着て、得意に人通りの多い所を歩いた事を記憶してゐる。其の時、子規はどこからか夏蜜柑を買うて來て、之を一つ食へと云つて余に渡した。余は夏蜜柑の皮を剝いて、一房毎に裂いては嚙み、裂いては嚙んで、あてどもなくさまようて居ると、いつの間にやら幅一間位の行詰まり小路に出た。子規は笑つてゐた。膝掛をとられてふるへてゐる今の余を見ても、子規は又笑ふであらう。然し死んだものは笑ひたくても、顫へてゐるものは笑はれたくても、相談にはならん。

賀茂の森　京都市の東北部にある下賀茂神社の森、糾の森といふ

かんからゝんは長い橋の袂を左へ切れて長い橋を一つ渡つて、ほのかに見える白い河原を越えて、藁葺とも思はれる不揃な家の間を通り抜けて、梶棒を横に切つたと思つたら、四抱か五抱もある大樹の幾本となく提灯の火にうつる鼻先でぴたりと留つた。寒い町を通り抜けて、よく〳〵寒い所へ來たのである。遙なる頭の上に見上げる空は、枝の爲に遮られて、手の平程の奥に料峭たる星の影がきらりと光を放つた時、余は車を降りながら、元來何處へ寢るのだらうと考へた。

「これが賀茂の森だ」と主人が云ふ。「賀茂の森がわれ〳〵の庭だ」と居士がいふ。大樹をめぐつて、逆に戻ると玄關に燈

清水の堂　清水觀音堂のこと、音羽山清水寺

西國　愛媛縣松山中學の教師に赴任した

が見える。成程家があるなと氣がついた。

子規と來て、ぜんざいと京都と同じものと思つたのはもう十五六年の昔になる。夏の夜の月圓きに乘じて、清水の堂を徘徊して、明かならぬ夜の色をゆかしきものの樣に、遠く眼を微茫の底に放つて、幾點の紅燈に夢の如く柔なる空想を縱まゝに醉はしめたことは、制服の釦を眞鍮と知りつゝも黃金としひたる時代である。眞鍮は眞鍮と悟つた時、われ等は制服を捨てて赤裸のまゝ世の中へ飛出した。子規は血を嘔いて新聞屋になる、余は尻を端折つて西國へ出奔する。お互の世はお互に物騷になつた。物騷の極子規はとう〳〵骨になつた。其の骨も今は腐れつゝある。子規

新聞屋　東京朝日新聞社に入つた

圓山　京都市四條通の東、祇園の後方

の骨が腐れつゝある今日に至つて、よもや漱石が教師をやめて新聞屋にならうとは思はなかつたらう。漱石が教師をやめて、寒い京都へ遊びに來たと聞いたら、圓山へ登つた時を思ひ出しはせぬかと云ふだらう。新聞屋になつて、紅の森の奥に、哲學者と、禪居士と若い坊主頭と、古い坊主頭と一緒にひつそり閑と暮して居ると聞いたら、それはと驚くだらう。やつぱり氣取つてゐるんだと冷笑するかも知れぬ。子規は冷笑が好きな男であつた。

若い坊さんが「お湯にお入り」と云ふ。主人と居士は余がふるへてゐるのを見兼ねて「公、まづ入れ」と云ふ。賀茂の水の透き徹るなかに全身をつけた時は、齒の根が合はぬ位であ

郡内（山梨縣南北都留郡の名、この地の産の絹織の名となつた）

つた。湯に入つてふるへたものは古往今來澤山あるまいと思ふ。湯から出たら「公、まづ眠れ」と云ふ。若い坊さんが厚い蒲團を十二疊の部屋に擔ぎこむ。「郡内か」と聞いたら「太織だ」と答へた。「公の爲に新調したのだ」と説明がある上は、安心して我がものと心得て差支なしと考へた故、御免を蒙つて寢る。

寢心地は頗る嬉しかつたが、上に掛ける二枚も、下へ敷く二枚も、悉く蒲團なので、肩のあたりへ糺の森の風がひやりひやりと吹いて來る。車に寒く、湯に寒く、果は蒲團にまで寒かつたのは心得ぬ。京都では袖のある夜着はつくらぬものの由を主人から承つて、京都はよく〳〵人を寒がらせる

所だと思ふ。

眞夜中頃に、枕頭の違棚に据ゑてある、四角の紫檀製の枠に嵌めこまれた十八世紀の置時計が、チーンと銀椀を象牙の箸で打つやうな音を立てて鳴つた。夢の中にこの響を聞いて、はつと眼を醒ましたら、時計はとくに鳴り止んだが、頭の中はまだ鳴つてゐる。しかしその鳴りかたが、次第に細く、次第に遠く、次第に濃やかに、耳から耳の奥へ、耳の奥から腦のなかへ、腦のなかから心の底へ浸みわたつて、心の底から心のつながる所で、しかも心のついて行くことの出來ぬ、はるかなる國へ拔け出して行くやうに思はれた。この涼しき鈴の音が、わが肉體を貫いて、わが心を透かして無限の

幽境に赴くからは、身も魂も氷盤の如く清く、雪甌の如く冷やかでなくてはならぬ。太織の夜具の中なる余は愈〻寒かつた。

曉は高い欅の梢に鳴く烏で再度の夢を破られた。此の烏はかあとは鳴かぬ。きやけえ、くうと曲折して鳴く。單純なる烏ではない。への字烏、くの字烏である。賀茂の明神がかく鳴かしめて、うき我をいとど寒がらしめ給ふの神意かも知れぬ。

かくして太織の蒲團を離れたる余は、ふるへつゝ窓を開けば、依稀たる細雨は、濃やかに糺の森をこめて、糺の森はわが家を遶りて、わが家の寂然たる十二畳はわれを封じて、余は

幾重ともなく寒いものに取圍まれてゐた。

春寒の社頭に鶴を夢みけり　（漱石全集）

二　二百十日（自修文）

ぶらりと兩手をさげたまゝ、圭さんがどこからか歸つて來る。

「何處へ行つたね。」

「ちよつと、町を歩いて來た。」

「何か觀るものがあるかい。」

「寺が一軒あつた。」

「それから。」

「銀杏の樹が一本、門前にあつた。」

「それから。」

「銀杏の樹から本堂まで一町ばかり石が敷きつめてあつた。非常に細長い寺だつた。」

「入つて見たかい。」

「やめて來た。」

「その外に何もないかね」

「別段何もない。一體、寺といふものは大概の村にあるね、君。」

「さうさ、人間の死ぬ處には必ずある筈ぢやないか。」

「なるほどさうだね。」

と圭さん、首をひねる。圭さんは時々妙な事に感心する。暫くして、ひねつた首を眞直にして、圭さんがかういつた。

「それから鍛冶屋の前で、馬の蹄鐵(クツ)を替へる所を見て來たが、實に巧なもの

だね。」

「どうも寺だけにしては、ちと時間が長過ぎると思つた。馬の蹄鐵がそんなに珍しいかい。」

「珍しくなくても見たのさ。君、あれに使ふ道具が幾通りあると思ふ。」

「幾通りあるかな。」

「あてて見給へ。」

「あてなくてもいゝから敎へるさ。」

「何でも七つばかりある。」

「そんなにあるかい。何と何だい。」

「何と何だつて、確にあるんだよ。第一爪をはがす鑿と、鑿をたゝく槌と、それから爪を削る小刀と、爪をゑぐる妙なものと、それから……」

「それから何があるかい。」

「それから變なものがまだいろ〳〵あるんだよ。第一、馬のおとなしいには驚いた。あんなに削られても、忍ぐられても平氣で居るせ。」

「爪だもの。人間だつて平氣で爪を切るぢやないか。」

「人間はさうだが、馬だせ、君。」

「馬だつて人間だつて爪に變りはないやね。君はよつぽど呑氣だよ。」

「呑氣だから見て居たのさ。然し、薄暗い處で赤い鐵を打つと綺麗だね。ぴち〳〵火花が出る。」

「出るさ、東京の眞中でも出る。」

「東京の眞中でも出ることは出るが、感じが違ふよ。かういふ山の中の鍛冶屋は、第一、音から違ふ。そら、此處まで聞えるせ。」

初秋の日脚はうそ寒く遠い國の方へ傾いて、さびしい山里の空氣が心細い夕暮を促すなかに、かあん〳〵と鐵を打つ音がする。

ミナヒ
竹刀
竹を割り中
細ぐいたて皮
つぼをはめたもの
代表竹刀は全部
皮で包んあるもの

「聞えるだらう。」

と圭さんがいふ。

「うん。」

と碌さんは答へたきり、默然として居る。隣の部屋で何だか二人、しきりに話をしてゐる。

「そこでその相手が竹刀(シナヒ)を落したんだあね。するとそのちよいと小手を取つたんだあね。」

「ふうん。とう〳〵小手を取られたのかい。」

「とう〳〵小手を取られただあね。ちよいと小手を取つたんだが、そこがそら竹刀を落したものだから、どうにもかうにもしやうがないやあね。」

「ふうん。竹刀を落したのかい。」

「竹刀は、そら、さつき落してしまつたあね。」

「竹刀を落してしまつて、小手を取られたら困るだらう。」
「困らあね。竹刀も小手も取られたんだから。」
二人の話は何處までも竹刀と小手で持ちきつて居る。默然として對座してゐた圭さんと碌さんは、顏を見合はせてにやりと笑つた。
かあん〳〵と鐵を打つ音が靜な村へ響き渡る。癇走つた上に何だか心細い。
「まだ馬の蹄鐵を打つてる。何だか寒いね。君。」
と圭さんは白浴衣の下で堅くなる。碌さんも同じく白地の單衣の襟を搔合せて、だらしのない膝頭を行儀よく揃へる。やがて圭さんがいふ。
「僕の子供の時住んでゐた町の眞中に、一軒豆腐屋があつてね。」
「豆腐屋があつて？」
「豆腐屋があつて、其の豆腐屋の角から一町ばかり爪先あがりにあがると、

寒磬寺といふお寺があつてね。」
「寒磬寺といふお寺がある？」
「ある。今でもあるだらう。門前から見ると只大竹藪ばかり見えて、本堂も庫裏もないやうだ。そのお寺で、毎朝四時頃になると誰だか鉦をたゝく。」
「誰だか鉦をたゝくつて、坊主がたゝくんだらう。」
「坊主だか何だか分らない。唯竹の中でかん〳〵と幽かにたゝくのさ。冬の朝なんぞ霜が強く降つて、蒲團の中で世の中の寒さを一二寸の厚さに遮つて聞いてゐると、竹藪の中から、かん〳〵と響いて來る。誰がたゝくのだか分らない。僕は寺の前を通るたびに、長い石疊と、倒れかゝつた山門と、山門を埋め盡す程な大竹藪を見るのだが、一度も山門の中をのぞいたことがない。唯竹藪の中でたゝく鉦の音だけを聞いては、夜具のう

ちで海老のやうになるのさ。」
「海老のやうになるつて？」
「うん。海老のやうになつて、口のうちで、かん〳〵、かん〳〵といふのさ。」
「妙だね。」
「すると、門前の豆腐屋がきつと起きて、雨戸を明ける。ぎつ〳〵と豆を臼で挽く音がする。ざあ〳〵と豆腐の水を換へる音がする。」
「君の家は全體どこにある譯だね。」
「僕の家は、つまりそんな音が聞える處にあるのさ。」
「だから何處にある譯だね。」
「すぐ傍さ。」
「豆腐屋の向ふか、隣りかい。」
「なに二階さ。」

「どこの。」
「豆腐屋の二階さ。」
「へえゝ、そいつは——。」
と碌さんは再び驚いた。
「それから垣根の朝顔が茶色に枯れて、引張るとから〳〵鳴る時分、白いもやが一面におりて、町の外れの瓦斯燈に燈がちら〳〵すると思ふと、又鉦が鳴る。かん〳〵、竹の奥で冴えて鳴る。それから門前の豆腐屋が、この鉦を合圖に腰障子をはめる。」
「門前の豆腐屋といふが、それが君の家ぢやないか。」
「僕の家、卽ち門前の豆腐屋が腰障子をはめる。かん〳〵といふ聲を聞きながら、僕は二階へあがつて蒲團を敷いて寢る。——僕のうちの油揚は旨かつた。近所で評判だつた。」

隣の座敷の小手と竹刀は雙方ともおとなしくなつて、向ふの縁側では六十餘りの肥つた爺さんが、圓い脊を柱にもたせて、胡坐(アグラ)のまゝ毛抜で顎(アゴ)の髯を一本々々に抜いてゐる。髯の根をうんと抑へてぐいと抜くと、毛抜は下へ彈ね返り、顎は上へ反り返る。まるで器械のやうに見える。

「あれは幾日かゝつたら抜けるだらう。」

と碌さんが圭さんに質問をかける。

「一所懸命にやつたら半日ぐらゐで濟むだらう。」

「さうは行くまい。」

と碌さんが反對する。

「さうかな。ぢや一日かな。」

「一日二日で綺麗に抜けるなら譯はない。」

「さうさ、ことによると一週間もかゝるね。見給へ、あの丁寧に顎を撫で廻

しながら抜いてるのを。」

「あれぢや、古いのを抜いちまはないうちに、新しいのが生えるかも知れないね。」

「兎に角痛いことだらう。」

と圭さんが話頭を轉じた。

「痛いには違ひないね。忠告してやらうか。」

「なんて。」

「よせつてさ。」

「餘計なことだ。それより幾日かゝつたら、みんな抜けるか、きいてみようぢやないか。」

「うん、よからう。君がきくんだよ。」

「僕はいやだ。君がきくのさ。」

「きいてもよいが詰らないぢやないか。」
「だから、まあよさうよ。」
と、圭さんは自己の申し出を惜しげもなく撤回した。
一度途切れた村鍛冶の音は、今日山里に立つ秋を、幾重の稻妻に碎くつもりか、かあん〳〵と澄みきつた空の底に響き渡る。
「頻にかん〳〵やるな。どうもあの音は寒磬寺の鉦に似てゐる。」
「妙に氣にかゝるんだね。其の寒磬寺の鉦と豆腐屋の伜と何か關係があるかい。全體君が豆腐屋の伜から今日までに變化した因緣は、どういふ筋道なんだい。少し話して聞かせないか。」
「聞かせてもいゝが、何だか寒いぢやないか。ちよいと夕飯前に溫泉に入らう。君いやか。」
「うん入らう。」

圭さんと碌さんは手拭をぶら下げて庭へおりる。棕梠緒の貸下駄には、都らしく宿の燒印が押してある。
「時に君、背中を流してくれないか。」
「僕のも流すかい。」
「流してもいゝさ。隣の部屋の男も流しくらをやつてたせ、君。」
「隣の男の背中は似たり寄つたりだから公平だが、君の背中と僕の背中と大分面積が違ふから損だ。」
「そんな面倒な事をいふなら一人で洗ふばかりだ。」
と圭さんは兩足を湯壺の中にうんと踏ん張つて、ぎうと手拭をしごいたと思つたら、兩端を握つたまゝ、びしやりと音を立てて斜に膏ぎつた背中へ當てがつた。やがて二の腕へ力瘤が急に出來あがると、水を含んだ手拭は岡のやうに肉づいた背中をぎう〳〵こすり始める。

手拭の運動につれて、圭さんの太い眉がくしやりと寄つて來る。鼻の穴が三角形に膨脹して、小鼻がムッとして左右に展開する。口は腹を切る時のやうに堅くくひしばつたまゝ、兩耳の方まで裂けて來る。

「まるで仁王のやうだね。仁王の行水だ。そんな猛烈な顏がよく出來るね。こりや不思議だ。さう眼をぐり〳〵させなくつても、背中は洗へさうなものだがね。」

圭さんは何にもいはずに一所懸命にぐい〳〵こする。こすつては時々手拭を溫泉に漬けて、十分湯を含ませる。含ませるたんびに碌さんの顏へ、汗と膏と垢と溫泉の交つたものが十五六滴づつ飛んで來る。

「こいつは降參だ。ちよつと失敬して流しの方へ出るよ。」

と圭さんは湯槽（ユブネ）を飛出した。飛出しはしたものの、感心の極、流しへ突立つたまゝ、茫然として仁王の行水を眺めて居る。

「あの隣の客は元來何者だらう。」

と圭さんが湯槽の中から質問する。

「隣の客どころぢやない。その顏は不思議だよ。」

「もう濟んだ。あゝいゝ心持だ。」

と圭さんは手拭の一端を放すや否や、ざぶんと溫泉の中へ、石のやうに大きな背中を落す。滿槽の湯は一度に面喰つて、槽の底から大恐慌を持上げる。ざあつ〳〵と音がして流しへ溢れ出す。

「あゝいゝ心持だ。」

と圭さんは湯の中でいつた。

「なるほど、さう遠慮なしに振舞つたら、好い心持に相違ない。君は豪傑だ。」

「時にあの竹刀と小手のことばかりいつてる隣の客は、ありや全體何物だい。」

と圭さんが思ひ出したやうにいふ。碌さんは、

「――そこでその小手を取られたんだあね――。」

と、答へる代りに隣の眞似をする。

「はゝゝゝ。そこでそら竹刀を落したんだあねか。はゝゝゝ。どうも氣樂なものだ。」

と圭さんも眞似して見る。

「なに、あれでも實は慷慨家かも知れない。そらよく草雙紙にあるぢやないか。何とかの何々、實は海賊の張本毛剃九右衞門て。」

毛剃九右衞門　近松門左衞門作の博多小女郎浪枕に出る人物

「海賊らしくもないせ。さつき溫泉に入りに來る時、のぞいて見たら、二人とも木枕をしてぐう〳〵寢てゐたよ。」

「木枕をして寢られるくらゐの頭だから、そら、そこで、その、小手を取られるんだあね。」

と碌さんは、まだ眞似をする。

「竹刀も取られるんだあねか。はゝゝゝ。何でも赤い表紙の本を胸の上へ載せたまんま寢て居たよ。」

「その赤い本が、何でもその竹刀を落したり、小手を取られるんだあね。」

と碌さんは、どこまでも眞似をする。

伊賀の水月　伊賀越の仇討を記した講談本

「何だらう、あの本は。」

「伊賀の水月さ。」

と碌さんは躊躇もなく答へた。

「伊賀の水月。伊賀の水月たあ何だい。」

「伊賀の水月を知らないのかい。」

「知らない。知らなければ恥かな。」

と圭さんと一寸首をひねつた。

「恥ぢやないが、話せないよ。」
「話せない。なぜ。」
「なぜつて、君、荒木又右衛門を知らないか。」
「うん、又右衛門か。」
「知つてるかい。」
と碌さん又湯の中へ入る。圭さんは又槽の中へ突立つた。
「もう仁王の行水は御免だよ。」
「もう大丈夫、背中は洗はない。餘り入つてると逆上せるから、時々かう立つのさ。」
「唯立つばかりなら安心だ。——それで、その荒木又右衛門を知つて居るかい。」
「又右衛門。さうさ、どこかで聞いたやうだね。豐臣秀吉の家來ぢやない

荒木又右衛門
柳生流の名人伊賀越の仇討をした人（寛永十四年（或は二十年）歿、年四十一）

か。」
と圭さん、飛んでもないことをいふ。
「はゝゝゝ。こいつは呆れた。隨分えらいことはいふやうだが、どうも何も知らないね。」
「ぢや待つた、少し考へるから。又右衛だね、又右衛、荒木又右衛門だね。待ち給へよ、荒木の又右衛門と。うん分つた。」
「何だい。」
「相撲取だ。」
「はゝゝゝ荒木、はゝゝゝ荒木又、はゝゝゝ又右衛門が、相撲取。愈呆れて仕舞つた。實に無識だね。はゝゝゝ。」
と碌さんは大恐悅である。
「そんなに可笑しいか。」

落ち着く先
近松半二の伊賀越道中雙六の沼津の段にある語

「可笑しいつて、誰に聞かせたつて笑ふぜ。」
「そんなに有名な男か。」
「さうさ。荒木又右衛門ぢやないか。」
「だから僕もどこかで聞いた樣に思ふのさ。」
「そら『落ち着く先は九州相良』つていふぢやないか。」
「いふかも知れんが、その句は聞いたことがないやうだ。」
「困つた男だな。」
「ちつとも困りやしない。荒木又右衛門ぐらゐ知らなくたつて、毫も僕の人格には關係はしまい。それよりも五里の山路が苦になつて、やたらに不平を並べるやうな人が困つた男なんだ。」
「腕力や脚力を持出されちや駄目だね。到底叶ひつこはない。そこへ行くと、どうしても豆腐屋出身の天下だ。僕も豆腐屋へ年季奉公に住込んで置けばよかつた。」
「君は第一、平生から懦弱でいけない。ちつとも意志がない。」
「これで餘つ程あるつもりなんだがな。唯饂飩に逢つた時ばかりは、全く意志が薄弱だと、自分ながら思ふね。」
「はゝゝゝ、詰らん事をいつてゐらあ。」
「然し豆腐屋にしちや、君のからだは綺麗過ぎるね。」
「こんなに黑くつてもかい。」
「黑い白いは別として、豆腐屋は大概刺青(ホリモノ)があるぢやないか。」
「なぜ。」
「なぜか知らないが、刺青があるもんだよ。君、なぜほらなかつた。」
「馬鹿あいつてらあ。僕のやうな高尙な男がそんな愚な眞似をするものか。僕にはそんなものは向かない。荒木又右衛門だつてほつちや居ま

い。」

「荒木又右衞門か。そいつは困つたな。まだそこまでは調べが屆いて居ないからね。」

「そりやどうでもいゝが、ともかくも明朝(アシタ)は六時に起きるんだよ。」

「さうしてともかくも饂飩を食ふだらう。僕の意志の薄弱なのにも困るかも知れないが、君の意志强固なのにも辟易するよ。うちを出てから僕のいふことは一つも通らないんだからな。全く唯々諾々として命令に服してゐるんだ。豆腐屋主義は嚴しいもんだね。」

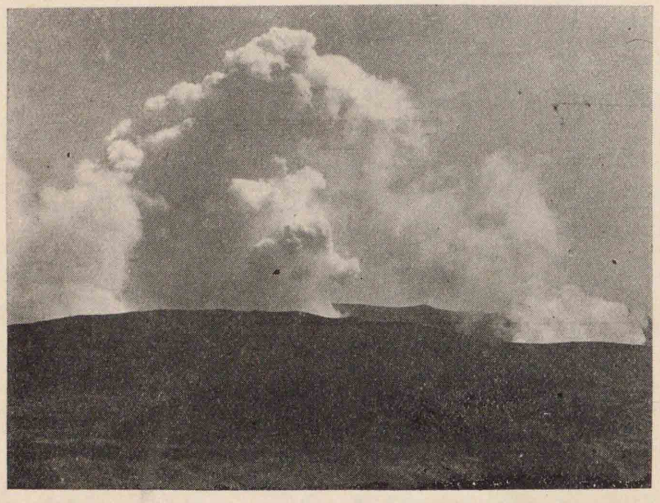
「なに此のくらゐ强硬にしないと增長していけない。」

「僕がかい。」

「なあに世の中の奴等がさ。」

「然しそりや見當違ひだぜ。そんな人の身代りに、僕が豆腐屋主義に屈從

するなあ堪らない。どうも驚いた、今後君と旅行するのは御免だ。」



阿蘇山噴火口

「なあに構はんさ。」

「君は構はなくつても、こつちは大いに構ふんだよ。その上、旅費は綺麗に折半されるんだから愚の極だ。」

「然し僕のお蔭で、天地の壯觀たる阿蘇の噴火口を見ることが出來るだらう。」

「かはいさうに。一人だつて阿蘇ぐらゐ登れるよ。時にあの髯を拔いた爺さんが、手拭をさげてやつて來たぜ。」

「ちやうどよいから、君一つ聞いて見給へ。」
「僕はもう湯氣で逆上せさうだから、出るよ。」
「まあいゝさ、出ないでも。君がいやなら僕が聞いて見るから、もう少し入つて居たまへ。」
「おや、後から竹刀と小手が一緒に來たぜ。」
「どれ。なるほど揃つて來た。あとからまだ來るぜ。やあ婆さんが來た。婆さんもこの湯槽へ入るのかな。」
「僕はともかくも出るよ。」
「婆さんが入るなら、僕もともかくも出よう。」
風呂場を出ると、ひやりと吹く秋風が、袖口からすうと入つて、素肌を腹の方へ吹抜けた。圭さんは、はつくしようと大きなくしやみを無遠慮にやる。あがり口に白芙蓉が五六輪、夕暮の秋をさびしく咲いて居る。見上げる向

ふでは、阿蘇の山がごう〳〵と遠いながら鳴つてゐる。
「あすこへ登るんだね。」
と碌さんが云ふ。
「鳴つてるぜ。愉快だな。」
と圭さんが云ふ。

（二百十日）

千家元麿

明治二十一年東京市麹町區に生れた。慶應義塾大學に學んだ。詩人。

一　無題

花や新芽の匂ふ森の下道で

二人の若い農夫に會つた
女は土瓶を下げ　男は鍬を肩にして
雲雀の啼く丘の方へ
並んで靜に歩いて行つた
二人の顔ははち切れさうによく肉附き
日に燒けて健康の血色に輝き
柔い微笑が眼に光つてゐた

二　朝飯

朝　家の中に日の光が舞ひこんで
天井に輝く

その下に食卓を並べて
妻と自分と子供と坐る
妻は自分たちの食物を一人で働いてよそつてくれる
自分と子供とは　待ちかねて手を出す
この朝は　少しも寒いとは思はない
皆　默つて食べはじめる　靜だ
思はず祈りたくなる
顏に力がこもつて　幸福だと默つて思ふ
妻はいろんなものに手を出す子供をちよい〳〵叱る

子供も負けて居ないで　小ぜり合ひをやる
日は暖に天井で笑ひ　室内に一杯になる（野天の花）

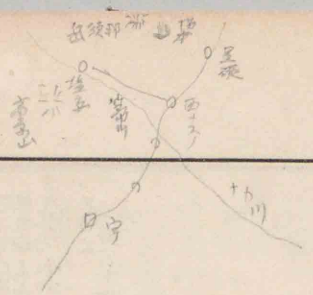
尾崎紅葉

名は徳太郎といひ、慶應三年江戸芝片門前に生れた。東京帝國大學に入つたが、中途退學して小説家となる。明治文壇の巨匠である。小説の作が頗る多い。明治三十六年歿す、年三十七。

一　鹽原

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれども、我は易らざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦み疲れつゝ、

鹽原
栃木縣にある有名な溫泉地西那須野より二一粁餘



西那須野
栃木縣那須郡東北本線の一驛、上野より一四八粁の地

始めて西那須野の驛に下車せり。直に西北に向ひて、今尚茫々たる古の那須野が原に入れば、天は濶く地は遐に、唯平蕪迷ひ斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其處ぞと見えて行くほどに路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡くる處に淙々の響ありて、之に架かれるを入勝橋とす。

輙ち橋を渡りて僅に行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに、壑深く陷りて、幾廻りせる葛折の、後には密樹に聲々の鳥呼び、前には幽草歩々の花を發き、愈〻登れば遙に木がくれの音のみ聞えし流の水上は淺く露れて、驚破こゝに空山の雷、白光を放ちて頽れ落ちたるかと凄じかり。道の右は山

松の調
琴の音に峯の松風かよふらしいづれの緒よりしらべ初めけん
（齋宮女御）

を斬りて長壁と成し、石幽に蘚碧くして、幾條ともなく白絲を亂し懸けたる細瀧・小瀧の珊々として濺げるは、嶺上の松の調も定めて此の緒よりやと見捨て難し。

車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を踏みて山中の景は始めて奇なり。

是より行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり。全逕

魚止の瀧

にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり。全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり。全村にして四十五湯。猶數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。

抑、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峰の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に泝る片岨の、四里に岐れ十一里に亙りて、到る處巉巖の水を挾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀑・兒が淵・左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗に、布瀑・龍が鼻・材木石・五色石・船岩なんどと眺め行けば、鳥居戸・前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

かくて、前面に、幾百仭の巨巖嶙峋たる天狗岩の奇勝を仰ぎ、小夜の川原の激湍怪石の磊砢たるを俯瞰し、途すがら、崖の處々に咲殘りたる躑躅・山藤など眺めて、車を急がするほどに、鹽釜の湯・甘湯澤・小太郎が淵、路の頭に高きは寺山、低きは人家の在る處、卽ち畑下戸。一村十二戸、溫泉は五ヶ處に涌きて五軒の宿あり。此に清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩く廻れる磧に臨み、俯しては水石の粼々たるを弄び、仰げば西に富士・喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は、二十丈の絶壁に懸りて素縑を垂れたる如き吉井瀑あり。東北は山又山を重ねて琅玕の玉簾深く、夏日の畏るべきを遮りたれば、四面遊目に足りて、丘壑の富

を擅にし、林泉の奢を窮め、また有るまじき清福自在の別境なり。

我は此の繪を看る如き清穩の風景に遇ひて、彼の途上嶮しき巖と激しき流との爲に、幾度か魂飛び肉消して、理むる方なく搔亂されし胸の中も、藹然として頓にやはらぎ、恍然としてすべてを忘れたり。

尾崎紅葉

誠に、好くこそ我は來つれ。山の麗しといふも、壤の堆きもののみ。川ののどけしといふも、水の逝くに過ぎざるのみ。牢として拔くべからざる我が半生の痼疾は、いかでか壤と

水との醫すべきと、齒牙にも懸けず侮りたりし己こそ、まづ侮らるべきおろかのものなれや。

見よ〳〵、木々の綠も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹き來る風も、日の光も、鷄の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世の物ならで、我は茲に憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と輕く、心は此の水と淡し。希はくは、今よりかくの如くにして我が生を終へん。

（紅葉全集）

坪内逍遙

名は雄藏といひ、安政六年美濃國加茂郡太田村尾張代官所に生れた。帝國大學政治科を卒業したが、志を文學に轉じた。文學博士。早稲田大學に長く英文學を講じ、現に名譽教授である。沙翁研究家として名高い。小說、劇作、飜譯、評論の著が多い。

一　桐一葉（第七幕）

蘖を食ふことは難しと雖も、未だ如かず、生きて別るゝことの難かるには、苦しきことは心肝にあり。晨雞鳴いて殘月薄く、征馬連りにいなゝいて行人出づ。はや分れゆく橫雲や、殘んの星を一つづつ、鐘が消しゆくいなのめの、長良堤に秋たけて、一むら蘆に風黑く、ありあけすごき大川水、ゆきて歸らぬ浪の音、狹霧にむせび白けゆく、千草がかげの蟲の聲、哀れはいと

茨木
摂津國三島郡茨木町、且元はこゝで二萬五千石を領してゐた

伊豆守
石川伊豆守貞政

未の刻
午後二時

どまさるらん。片桐市正且元は、居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、未の刻に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづ〳〵と、長良堤にさしかゝる。其の時市正手綱をひかへ、從兵を先へ進ませ、弟主膳正を呼び近づけ、あらためていひけるやう、

坪内逍遙

市「いかに弟、われ昨日討手を待ちうけ、自殺せんず覺悟なりしに、伊豆守が殘兵ぬけがけなし、討手の荒膽をひしぎし爲、備へありと見たがへしか、また寄せ來らん模樣もなく、剩へ夜に入りては、外にありし家臣まで、變をきゝつけ馳せ集まり、血氣のともがら之に氣を得て、薪に油をそゝげる如く、弓・鐵砲とひしめき騷ぎ、命をきかばこそ、打棄ておかば、珍事に及ばんも圖りがたく、暫らく彼等をなだめん爲、一先茨木へ引退き、後事を圖らんとはいひしものの、昨夜ほのかに傳へ聞けば、織田入道も君を見限り、俄に京表へ退去の由。お家の危機いよ〳〵迫んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に到らんこと必定なり。それにつきて所存あつて、先刻今村三右衞門を、木村が邸へ走らせたり。おつつけ三右が吉左右あらん。我はこれにて相待つべし、御身はしば

織田入道
常眞

今村三右衞門
且元の家來

長門さま　木村長門守重成

らく我に代り、手勢を差配し、途中に不慮のまちがひなきやう、一足先へまゐらるべし。

と言葉のうち、はるかに慕ひかけくる足おと。

主「あの足おとはたしかに今村。

市「三右衛門か。

今「我が君これにござありしか。長門さまにはおつつけこれへ。

市「ほゝ大儀々々。滿足なるぞよ。しからば主膳は一足先へ。三右衛門もこゝかまはず。我はこれにて相待つべし。

主「仰せではござりますれど、油斷ならざる當節柄、如何なる

變事あらんも知れず。

今「只御一人、このところに御座あらんは心元なし。

主「せめて我々、

二人「兩人は。

市「はて入らぬ遠慮、氣づかひ致すな。往け〳〵。

主「ぢやと申して、

市「はて、往けと申すに。

二人「はゝあ。

顏見合はせ是非なくも、主膳をさきに三右衛門、心殘して行きすぎる。後には何か一思案、寂然として駒たつる、長良づつみのありあけがた。塒（ネグラ）に囀る小鳥の聲、川霧やう〳〵晴れゆけば、遠樹糢糊として幹を分ち、

故殿下　豐臣秀吉を指す

加藤肥州　加藤肥後守清正

大政所　秀吉の室

ほの見えわたる賤が屋に、一筋のぼる朝煙。くだかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の、空には似ぬや入るかたの、月すさまじき柳蔭。枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し遠方に、おぼろ〳〵とあらはるゝ、名におほ阪の四衢八街、悄然としてさびしげに、一棟高く聳えしは、

市「おゝあれこそはお天守ぢやなあ。……南山不落と祝はせられ、千萬年の後迄もと、築かせられし大阪城。故殿下かくれさせたまひて後、まだ程もなき礎ゆらぎ、諸大名の心ははなればなれ。取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附同黨して相鬩げば、大政所の御方さへ、當家を餘所に見そなはし、浮世はなれし御ありさま。脣齒已にほろぶ、今にも

千姫君　秀頼の室、德川秀忠の女

お家とこしなへに云々　方廣寺の鐘銘を指す

あれ事起らば、金城湯池も其の甲斐なく……、

いひかけて聲くもらせ、

市「須彌より重き御遺命、夢いさゝかも忘れざれど、御運の末か情なや、此の且元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の道火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が元となり、降つてわいたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること、御運の末といひながら……、

こらへず馬よりとび下り、かなたに向ひ平伏なし、

市「これ併しながら不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の畏にかゝり、おほせつけられし御遺命に、背き奉るけふの仕合せ。不忠ともいふ甲斐なしとも、おぼしめさん。それを思へば且元が、この腸はちぎるゝばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御わび仕らん。御ゆるしなされて下さりませ。

在すが如く兩手をつき、人目なければやゝしばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心附き、

市「あゝ我ながら不覺の至り。我が大罪の御わびよりも、さしかゝるお家の安危。長門守には如何にせし。心元なきことどもぢやなあ。

御母公
秀頼の母淀君

すかしながむる折こそあれ、はるかに聞ゆる蹄の音、程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に中を走り來る木村長門守重成。

木「市正どのに候かな。

市「長門どの待ちかねしぞ。

いふ間にかけ寄るくつわづら、右手におりたち顔見合せ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖濡るゝ朝露や。風颯々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋のさびしさを、長良堤にとゞむらん。

木「もはや豐臣の御社稷も、いよ〳〵末となつたるか、棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。それがし圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の其の間に、思ひが

大野・渡邊
大野修理之助
治長
渡邊内藏之助
介紀

けぬ珍變あり、つゞいて足下に御討手と、昨朝承り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道どの日ごろに似げなく、激論の末席を蹴たて、只今退座ありしとばかり、後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る、大野・渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つてすて、腹かつ切らんと二度まで、刀の柄に手はかけしが、貴殿が日ごろの教訓を、思ひいだして無念を忍び、寃と知つて忠臣を、救ひ得ざりしいふ甲斐なさ。

悔むを且元おしなだめ、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねて屢〻申せし如く、お家

の大仇は彼等にあらず、鼠輩の爲に命をおとすは、大忠臣の所爲にはあらじ。それがしとても此のたびの一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至り。大切なるはお家の後事。それがし退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、きのふまで去就を定めざりし、織田どの已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の秘密悉く洩れ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。此の上は只ひとへに籠城の計畫こそ肝要なれ。

木「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。

市「されば、今御城に、兵糧金銀は乏しからず、まつた猛將勇卒にもことかゝねど、得がたきは智謀の將なり。それがし

九度山　紀伊國伊都郡にある町、高野山の北谷、古の登口

眞田安房守　昌幸、幸隆の第三子、關原戰後、高野山に放れて、そこに歿した

幸村　昌幸の第二子、元和元年茶臼山に戰死した、年四十六

長良堤の場面

之を慮り、萬一の備へをなし置きたり。

木「して其の智謀の將とは。

市「今九度山に隱れ忍び、信州上田前の城主眞田安房守が二男左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ、智勇兼備の良軍師。關原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺へるを、先年お味方となし置いたり。事起らば上使を

長曾我部盛親　土佐に出た豪傑、豐臣秀吉に討平されて臣となつた、慶長四年歿、年六十一

後藤又兵衞基次　黑田孝高、長政に仕へた勇士、元和元年戰死、年五十六

以て、急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は、一切彼の人に任せられよ。其の他關原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねて因みは附け置きたり。上御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配なり。

木「してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。

市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木あまた切りいださせ、商業のためといつはり、紀州川の川上より、浪花津に押し流させ、御船入に積み置いたり。まつた港口の御庫には、年ごろ力めて

購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るといふとも、尚支ふるに餘あるべし。

木「それに加へて故殿下が、貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費かさむと雖も、尚若干の餘財あり。

市「甲冑兵具も乏しからず。

木「城は名に負ふ南山不落。

市「眞田・後藤の智勇を以て、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、ひとへに君家を守護する時には、

木「たとへ關東の老奸雄、利をくらはせ、諸大名をなつけ、六十餘州の兵を盡くし、四方八面より攻寄すとも、

市「中々三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。

關東の老奸雄　徳川家康を指す

木「まつた若年には候へども、いよ〳〵軍はじまりなば、我また一方をうけたまはり、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹き飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石もまた透りぬべし。利欲に集る關東勢、何退くるに難かるべき。此の上は仰せにしたがひ、此の事君に言上なし、たゞちに軍の手配せん、みこゝろ安かれ市正どの。

市「ほゝ賴母しし〳〵。只大切は上下の一致。必ず忠勤勵まれよ。……とはいひながら往時に照らし、成りゆくすゑをかんがみれば、

木「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。

社鼠　君側の奸臣、晏子の話

城狐社鼠　城に住む狐も陽ぎ社にある鼠をとらうとすれば城をこぼち社を破らなければならぬ　君側の奸臣は除き難い

上 豐臣秀頼

大御所 德川家康

市「上御發明にわたらせらるれど、

木「讒佞これを蔽ふが故、

市「地の利はあれど人の和なく、

木「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏せし、六十餘州の民草も、

市「天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、いつしか靡く世の有様。

木「いかなればかくまでに、御運かたぶく西天の、

市「ありあけの影うすれつゝ、

木「東天紅と八面に、かしましくなくくだかけは、

市「新日東天に昇るといふ、

木「世の成行の

兩人「影なるか。

是非もなき世の有様と、入るかたの月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。市正おもてを正し、

市「萬一にも其の期に至り、百計合期せずばそれまでなり、當來を誰かは知らん。殪れて後止まんのみ。大丈夫豈徒らに杞憂せんや。後事を足下に託せし上は、もはや思ひ殘す事もなし、

木「してそこもとはこれよりして、

市「居城茨木へ一まづ立越え、

木「といはるゝはうけ取りがたし。若しもやこれが今生の、

市「あゝいや、いさぎよき最期をだに、遂ぐべき機會を失ひし、市正が命の拙さ。御詫の名こそ立ため、償ひがたき身の大罪。此の身一つを兎や角と、千筋に迷ふ心のうち。いやなに心ばかりかは、此の後とても、君の御影につきそひまゐらせ、萬一にも杞憂適中なし、大事去りなん其の時には、

木「それがしとても事破れて、御運の末となるときは、此の世の思ひ出、奉公をさめ、關東勢が眞中に、縱横無盡の血戰なし、花々しく、討死なさん。

市「おゝ勇ましし。いさぎよし。それがし存へ世にあらば、其の目ざましき働をば、餘所ながら見物なさん。尙再會

は黄泉にて、まづそれまでは長門どの。

木「さやうござらば市正どの。

市「隨分堅固で。

木「そこもとにも。

惜しきが中の生別離、まことや之に比ぶれば、蘖は蜜にや似たるらん。
右と左にたちわかれ、駒引寄せて式退や。悵然たる重成が、乘移りさま
ふりかへる、堤下に一もとくねり松。あやしの人影、すは曲者と、見る間
も疾しや打出す手裏劍。あつとたまぎる聲もろとも、ねらひはそれし
種ケ島、どうと大地に白倉權六。

白「且元覺悟。

と拔きうちの、襟がみつかみ頭顚倒。音きゝつけて物かげより、驚きか
け來る十河、今村、郎黨ども。見かへりもせず乘移る、秋さび月毛乘る人

の、心やいかに白駒の、勇むを制するかた手綱。引戻さるゝ後髪。

兩人「さらば〳〵。

と西東、見送るかたに霧や立つ、眼や曇るおぼろ〳〵。いなゝく駒の聲はして、立別れゆく兩人が、此の世に残す面影は、また見ぬ形とぞなりにける。

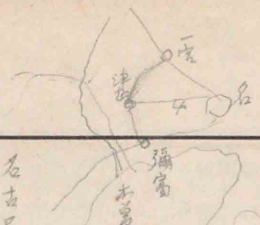
（桐一葉）

野口米次郎

明治八年愛知縣津島町に生れた。慶應義塾大學卒業後、歐米に赴き、日本英詩人としてヨネ、ノグチの名は喧傳された。慶應義塾大學教授。

一　松の木

私の少年の追憶は、弘淨寺の松の木で始まる……松は、雪舟



私の郷里
愛知縣津島町

雪舟
室町時代の畫僧

が墨色淋漓と描いた松のやうに、天へ昇らうとして地上との離別を惜む植物界の大蛇だ。弘淨寺は私の郷里にある淨土宗の寺である。詳しくいふと、郷里の家の二階に大きな丸窓があつて、外をのぞくと右手に見える寺である。しかし私の追憶に問題となるのは、この寺の屋根でない、この寺の墓場の隅に小さく埋まつてゐる私の妹でない、この寺の奥にある稲荷の社でない、また庭の池へ水を飲みに出る狐でない。幾百年たつても雄渾の氣魄を失はずに周圍を睥睨（ヘイゲイ）する松の木が、天氣のよい日には、箒目綺麗に掃除された本堂前の廣場へ黒い影を投げるので、この寺が私の追憶の最初の頁を塞ぐのである。この寺が、むしろこの大きな

松の木が、少年時代に於ける私の遊友達であつた。

私の少年の追憶には梅樹が無い、櫻花が無い、霧のやうに煙る晩春の柳が無い、又瀟洒な立姿の水仙がない。私は少年の時、この百年綠を變へない松から、横擴がりに下へ向つて稜々たる氣骨の幹や枝を無遠慮に伸ばす松から、一言で蔽ふと、大地の生氣が一本の樹木と化したと思はるゝ松の木から、所謂男性美の影響を受けた事を喜ぶものである。私はこの弘淨寺の松の木を遊友達としたといつたが、實際には私はその木を恐れたのである。一種の恐怖心を以てその木に接したのである。松には雲雨を得て天に昇る大蛇のやうな龜裂の入つた甲羅の皮膚がある。松には觸れる

と手を刺す針のやうな松葉がある。松には人に婉麗の感をそゝる何物もない。弘淨寺の松の木に關する私の追憶は、群青金泥の酒井抱一の松でなく、毅然として百難に堪へる雄姿が紙上で風雨を呼ぶ雪舟・探幽の松である。私は語らねばならない追憶が多い。

酒井抱一　畫家、名は忠因、姫路藩主、酒井氏の子、權大僧都となる、文政十一年歿、年六十八

探幽　狩野探幽、畫家、江戸時代の初期の人

煑えくり返るやうに熱い夏の日が續く。田地・田畑に、稻や麥が脣を潤し根を濕すに足る一滴の水もない。地面は破れ始め、樹木は萎れかける。日中は、蟬が雨か霰のやうに雨乞の歌を地上に降らす。夜分になると、家の前に雨乞の百姓を迎へるため、提燈が燃え篝火が焚いてある。御社の神主の家の座敷へ昔から靈驗あらたかといはれてゐる探幽

の畫が出されてから、もう十日以上になる……沛然たる雨を呼ぶ筈の探幽の瀑布は、どうしたものか、魔力を失つたのであらうか。處が十五日の滿願の朝、早くから無言の祈禱を歌つてゐる巨人がある。外ではない、弘淨寺の松の木である。間もなく天は曇り始め、力强い風が吹きだす……いな、それは雨を祈る松の木が吐きだす龍の唸り聲であらう。松の木の祈禱は答へられた。恐しく大粒の雨が落ち始め、半時間もたゝない中に天を空うして降る豪雨となつた。人間の歡喜以上に喜ぶのは弘淨寺の松の木である。たれか私の外に、篠突く雨を全身に浴び、傲然として立つこの松の偉觀壯觀を見たものがあるか。この松の木の態度は、百

倍の勇氣を振ひ起して三軍を叱咤する暴將軍のそれであつた。

私は弘淨寺の松を單に樹木とは思へなかつた……面を拂ふ春風に乘つて一つの白い蝶々がこの松にとまつた時、私はその溫顏に平和の微笑があることを知つた。群禽を眼下に睥睨して擴げた大鵬の羽が、急に美人の扇面と變つたと思つた。私は霞たなびく春の日に、この松が奏でる午後の催眠歌を聞いた。そしてこの松が雪の朝に、ぽつてりと大きな綿帽子を被り、その綿帽子が太陽の光線を受けて金剛石のやうな光を放つた時の光景はどうだ。私の家は傳統的に熱烈な佛教信者であつて、私は朝念佛を聞いて起き、

宵念佛を聞いて床に就いた。毎朝早く鐘の音が弘淨寺から響いた時、私は私が尊敬するあの松の木の音であるやうに感ぜざるを得なかつた。夕景になつて木魚の音が聞えて來た時、私は私の畏敬するあの松の木の聲であるやうに感ぜざるを得なかつた。私は夕景の木魚を聞くと、家の二階の丸窓をぱつたり締めてこの松を見ることを恐れた……

……夜陰の空に立つ其の姿は實に恐しいものであつた。私は、夜になると天狗の寢床になるであらうとさへ想像した。また私は母から、死んだ妹の杓子のやうな人魂が、この松の間へ落ちたといふことも聞いた。

弘淨寺の松の木に關し、私の忘れることの出來ない追憶が

もう一つある。私の追憶は九尺以上もあつたと思はれる彗星に關係して居る。世界が終局に近づく印として彗星が現れるのだと聞いた時、どんなに私の小さな胸はおの丶いたであらう。夜も三更に近い時、母は眠れる私をゆり起して二階へ連れ出し、例の丸窓を開けて「弘淨寺の松の木を見よ。」と語つた。私は恐る〳〵青臭い呼氣を吐く老龍の松を見た。老龍の角とも思はれる邊に、妖魔の彗星の光に照されて、松葉の針がぎら〳〵光つて居つたやうに感じた。私はどうしてこの物凄い深夜の光景を忘れることが出來ようと……それを思ふと、私は今も身振ひをして其の夜の恐怖に擊たれる。

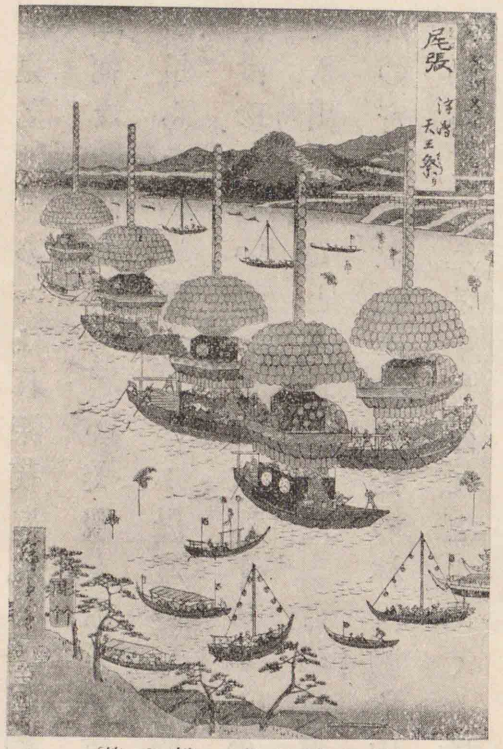
廣重
一立齋・江戸時代の浮世畫書家、安政五年歿、六十二

津島
愛知縣海東郡

私は餘り多辯に恐怖の松を語りすぎた。私は恐怖のあとに歡樂の松を語らねばならない。私の歡樂の松は、一の字に並んで、天王川といふ圓い瓢簞池の眞中を締括つて居る。この池の中へ突出して池を二分してゐる松林の土手を猿尾といつて居る。諸君は廣重の「六十餘州名所圖繪」の中で、津島の提燈祭の夜景を見たことがあるか。夜の山車の天邊をお椀形に飾る數百の白い提燈は、山車の中から響く太鼓の音に連れ、上下左右に動く……この山車が五臺揃つて溢れる夢幻の夢曲をこぼしながら、猿尾の松の木の彼方を練りながら、其の先頭の山車が將に此方の廣い池へ出ようとして松林を離れる光景が廣重の繪だ。私はこゝで廣重

牛頭天王
元は天竺の北の九相國の吉相國の王で、祇園精舍の守護神、津島神社の祭神

の繪を語るので無い。又この提燈祭を語るので無い。私の興味は猿尾の松の木に限られねばならない。私共は廣



津島天王祭（廣重筆）

い此方の池の堤防に立つて居ると想像する。堤防の眞中には牛頭天王の神輿が苔蒸す神社から出張つて、今山車が揃つて面前に禮拜して來るのを待つて居る。堤防の上には無禮講の見物人がぎつしりと鮨詰になつて居る。私の興味は猿尾の

松の木に限られねばならない。見よ練り出して來る大きな提燈のお椀は、小さな提燈の山は、今松の木の間から動いて見える。あゝこれ深夜に見る美の幻だ。

如何なる詩人でもこの美觀を歌ふには力が足らない、言葉が足らない。幾十といふ提燈の光に照らされて、猿尾の松林は、珍らしい青い色を放散する。この色は如何なる繪師でも出したことが無い色だ。この、支那の青磁以上に、池中海の青い波以上に青い松の林は、動く山車と共に上下左右に動いて見える。堤防でどよめく見物人の騒しい歡呼の聲に應じて動いて見える。この光り動く松樹の美觀に匹敵し得る美觀が、世界の何處に有るであらうか。もとより

佐屋川
木曾川の分流、津島川を分つ

有りはしない。

然し私は津島出身者として、更にもう一つの長い松林の美觀を語りたい。それは天王川から引續いて一里半にも及ぶ廣い立派な津島と前ケ須とを結び付ける堤防の兩脇を飾る松林をいふのである。この威風堂々たる堤防は、佐屋川が今日のやうに人間の力で破壞されて仕舞はなかつた舊時代の遺物である。私の少年時代には、佐屋川の綺麗な水が右側の松林の下へ廻つて來て、提燈祭の天王川へ注ぎ込んで居つた。其處に細い流を柳が緣を取つてゐて、春陽四月の頃になると柳の若芽が煙り、煙る若芽と水との間を澤山の燕が飛んだ事を記憶して居る。この見事な松林の

王朝時代
奈良、平安時代

木遣音頭
材木を流したり運んだりする時の唄

間を歩いて居ると、夏なほ寒い風が幾里の遠方から吹いて來る。もとよりその風に肌を嘗めさせるのも愉快の一つだが、私が最も愉快な光景として忘れられないのは、私の青い色と黄色の菜種の毛氈とを對照に眺めた時だ。松並木の左側は沃野千里——たとひ千里でなくも——と擴がる菜種の畦で、花盛りの時には、王朝時代の歌の色紙でも飛ぶやうに、幾百幾千といふ蝶々が溫い南風に乘つて飛ぶのを見るのだ。又かういふ季節に伊勢參の木遣音頭が聲高らかに松並木を流れて來ることもある。松樹の青色と菜種の黄色との配合……群青と金泥を惜氣なく六枚屏風に流したならば、どんなに見事な繪を成すで

嵐雪
服部氏、元祿時代の俳人、淡路國の人、芭蕉の門人、寶永四年歿、年五十四

行意
關白藤原基房の子、大僧正

あらう。私は青と黄との配合のみを美觀なりとはしない。松の木は正にこれ調和の神だ。如何なる自然の現象とでも調和して、しかも個性を失つたことが無い。むしろ對照となる諸相を美化し、雅化して、不思議な秘密を發揮する。嵐雪に句がある「花を出て松へしみ込む霞哉」右手に見る一面の花の山、それに對照する青い松林。この二つを結びつける霞の春景色に、何といふ婉麗さがあるであらう。朝はまだ早くて薄暗い霧が周圍を包んで居る。其の中にぬつくと顔を洗つて立つ青松一本の姿には、人の起きない以前に祈禱を捧げる信仰の深い清僧の面影がある。行意の歌に「ほの〴〵と與謝のふけひの朝霧にあらはれ渡る天の

橋立」とある。これぞ限りない詩趣ある一幅の日本畫ともいふべきであらう。私どもは、茜さす夕日に松の綠を對照させて見たい。樗良の句に、「夕日うれし月夜にまさる松の影」とある。初夏の一日も將に暮れようとして鳴始めた蟲の聲は、漫ろに寂寞を送る。私は日暮前一時間に感ずる寂寞味を最も心に滲みるものとして居る。時に眼前に横たはる松樹の影の長さ幾丈ぞ。

（松の木の日本）

樗良　志摩國鳥羽の俳人、畫を燕村に學んだ、安永元年歿、年五十二

森鷗外

名は林太郎といひ、文久二年石見國津和野に生れた。醫科大學卒業後、陸軍省に入り軍醫總監となつた。醫學博士、文學博士。外國文藝の飜譯、歷史小說の著が多い。大正十一年歿す。年六十一。

一　木精

巖が屏風のやうになつて立つてゐる。登山をする人が、始めて深山薄雪草の白い花を見つけて喜ぶのは、こゝの谷間である。

フランツはいつもこゝへ來て、ハルロオと呼ぶ。麻のやう

法王ローマのバチカン宮殿に居る法王の少年唱歌隊とともに行かれさうな

ブロンド 黄味を帶びた髪色

コントルバス 樂器、大きいヴイオラの形のもの

バイオリンの少し大きいもの

なブロンドな頭を振立てて、どうかしたらローマ法王の宮廷へでも生捕られて行きさうな高音で、ハルロオと呼ぶのである。

hallo こう、オイ、もし、呼ぶ、呼掛、

呼んでしまつて、ぢいつとして待つてゐる。暫くすると、大きい鈍いコントルバスのやうな聲でハルロオと答へる。これが木精（ダマ）である。

フランツはなんにも知らない。只暖かい野の朝、雲雀が飛立つて鳴くやうに、冷たい草叢の夕、蟋蟀（コホロギ）が忍びやかに鳴くやうに、こゝへ來てハルロオと呼ぶのである。併し木精の答へてくれるのが嬉しい。木精に答へて貰ふために呼ぶのではない。呼べば答へるのが當り前である。日の明る

く照つてゐる處に立つてゐれば、影が地に落ちる。地に影を落すために立つてゐるのではない。立つてゐれば、影が差すのが當り前である。そしてその當り前の事が嬉しいのである。

フランツは、父が麓の町から始めて小さい沓を買つて來て穿かせてくれた時から、こゝへ來てハルロオと呼ぶ。呼べばいつでも木精の答へないことはない。

フランツは段々大きくなつた。そして父の手傳をさせられるやうになつた。それで久しい間、例の岩の前へ來ずにゐた。

ある日の朝である。山を一面に包んでゐた雪が巔にだけ

残つて、方々の樅の木立が綠の色を現して、深い〳〵谷川の底を水がごう〳〵と鳴つて流れる頃の事である。フランツは久しぶりで例の岩の前に來た。そして例のやうにハルロオと呼んだ。麻のやうなブロンドな頭を振立てて呼んだ。併し聲は少し荒(サビ)を帶びた次高音になつてゐるのである。

呼んでしまつて、ぢいつとして待つてゐる。

暫くしてもう木精が答へる頃だなと思ふのに、山はひつそりしてなんにも聞えない。只深い〳〵谷川がごう〳〵鳴つてゐるばかりである。

フランツは久しく木精と問答をしなかつたので、自分が時

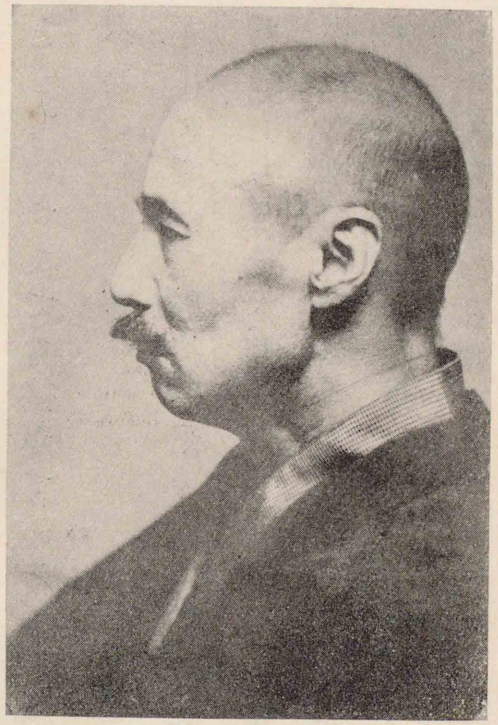
間の感じを誤つてゐるのかと思つて、又暫くぢいつとして待つてゐた。木精はやはり答へない。フランツはぢいつとしていつまでも待つてゐる。木精はいつまでも〳〵答へない。

これまでいつも答へた木精が、どうしても答へないはずはない。もしや木精は答へたのを、自分がどうかして聞かなかつたのではないかと思つた。

フランツは前より大きい聲をしてハルロオと呼んだ。そして又ぢいつとして待つてゐる。

もう答へるはずだと思ふ時間が經つ。山はひつそりしてゐて、ごう〳〵といふ谷川の音がするばかりである。

又前に待つた程の時間が經つ。聞えるものは谷川の音ばかりである。



森鷗外

これまではフランツは只不思議だ不思議だと思つてゐるばかりであつたが、此の時になつて急に何とも言へないほど心細く寂しくなつた。譬へばこれまで自由に動かすことの出來た手足が、ふいと動かなくなつたやうな感じである。麻痺の感

じである。麻痺は一部分の死である。死の息が始めてフランツの頭に觸れたのである。フランツは麻のやうなブロンドな髪が一本々々逆に竪つやうな心持がして、何を見るともなしに身の周圍を見廻した。目に觸れる程の物に何の變つた事もない。目の前には例の岩が屏風のやうに立つてゐる。日の光が、ところ〴〵霧の幕を穿つて、樅の木立を現してゐる。風の少しもない日の癖で、霧が忽ち細い雨になつて、今まで見えてゐた樅の木立が又隱れる。谷川の音の太い鈍い調子を破つて、どこかで清い鈴の音がする。牝牛の頸に懸けてある鈴であらう。

フランツは雨に濡れるのも知らずに、ぢいつと考へてゐる。

餘り不思議なので、夢ではないかと思つて見た。併しどうも夢ではなささうである。

暫くしてフランツは、何か思ひ付いたといふやうな風で「木精は死んだのだ。」とつぶやいた。そしてぼんやり自分の住んでゐる村の方へ引返した。

二

同じ日の夕方であつた。フランツはどうも木精の事が氣に懸かつてならないので、又例の岩の處へ出掛けた。

此の日丁度晝過から、極輕い風が吹いて、高い處にも低い處にも群がつてゐた雲が少しづつ動き出した。そして銀色に光る山の巔が一つ二つ見えて來た。フランツが二度目

に出掛けた頃には、巔といふ巔が、藍色に晴れ渡つた空に、はつきりと畫かれてゐた。そして斷崖になつて、山の骨のむき出されてゐるあたりは、紫を帶びた紅に匂ふのである。

フランツが例の岩の處に近づくと、忽ち木精の聲が賑かに聞えた。小さい時から聞馴れた大きい鈍いコントルバスのやうな木精の聲である。

フランツは「おや、木精だ。」と、覺えず耳をそばだてた。そして何を考へる隙もなく駈出した。例の岩の處に子供の集つてゐるのが見える。子供は七人である。皆ブリュネットな髪をしてゐる。血色の好い丈夫さうな子供である。

フランツはつひに見たことのない子供の群を見て、氣兼を

ブリュネット　フランス語、褐色の髪のこと

して立止まつた。

子供達は皆ぢいつとして木精を聞いてゐたのであるが、木精の聲が止んでしまふと、又聲を揃へてハルロオと呼んだ。勇ましい底力のある聲である。

暫くすると木精が答へた。大きい〳〵聲である、山々に響き、谷々に響く。

空に聳えてゐる山々の巔は、此の時あざやかな紅に染まる。そしてあちこちにある樅の木立は、次第に濃くなる鼠色にひたされて行く。

七人の知らぬ子供達は皆ぢいつとして、木精の尻聲が微になつて消えてしまふまで聞いてゐる。どの子の顏にも喜

の色が輝いてゐる。其の色は生の色である。

群を離れて、やはりぢいつとして聞いてゐるフランツの顏にも、喜が閃いた。それは木精の死なないことを知つたからである。

フランツは何と思つてか、そのまゝ踵を旋らして、自分の住んでゐる村の方へ歸つた。

歩きながら、フランツはこんな事を考へた。あの子供達はどこから來たのだらう。麓の方に新しい村が出來て、遠い國から海を渡つて來た人達が、そこに住んでゐるといふことだ。あれは大方その村の子供達だらう。あれが呼ぶハルロオには木精が答へる。自分のハルロオに答へないの

で、木精が死んだかと思つたのは間違であつた。木精は死ななない。併しもう自分は呼ぶことはよさう。今度呼んで見たら、答へるかも知れないが、もうよさう。

闇が次第に低い處から高い處へ昇つて行つて、山々の巔は最後の光を見せて、とう〳〵闇に包まれてしまつた。村の家にちらほら燈火がつき初めた。

（涓滴）

南山　關東州遼東半島の頸部にある山、日露戰爭の劇戰地

二　扣鈕

南山の　たゝかひの日に
袖口の　こがねのぼたん
ひとつおとしつ

ベルリン　ドイツ共和國の首都

パッサージュ　通路

エポレット　軍人の肩につける金モールの飾章

その扣鈕（ボタン）惜し
ベルリンの　都大路の
パッサージュ　電燈あをき
店にて買ひぬ
はたとせまへに

エポレット　かゞやきし友
こがねがみ　ゆらぎし少女
はや老いにけん
死にもやしけん

はたとせの　身のうきしづみ
よろこびも　かなしびも知る
袖のぼたんよ
かたはとなりぬ
ますらをの　たまと碎けし
もゝちたり　それも惜しけど
こも惜し扣鈕
身に添ふ扣鈕

（うた日記）

高瀬舟　京都加茂川に沿うてある高瀬川の通ひ舟

白河樂翁　磐城白河の城主松平定信のこと、嘗て幕府の老中となつて所謂寛政の治をなした

寛政　徳川十一代家齊の時代

知恩院　京都東山にある淨土宗の寺

一

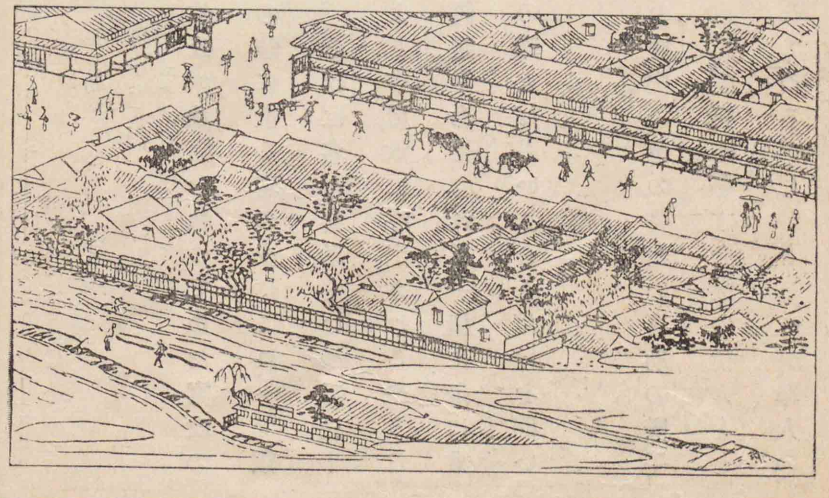
高瀬舟（自修文）

いつの頃であつたか。多分江戸で白河樂翁公が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつたらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。それは名を喜助といつて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類もないので、舟にも只一人で乘つた。護送を命ぜられて一緒に舟に乘込んだ同心羽田庄兵衞は、只喜助が弟殺しの罪人だといふことだけを聞いてゐた。

さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この痩肉の、色の蒼白い喜助の樣子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、庄兵衞をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の

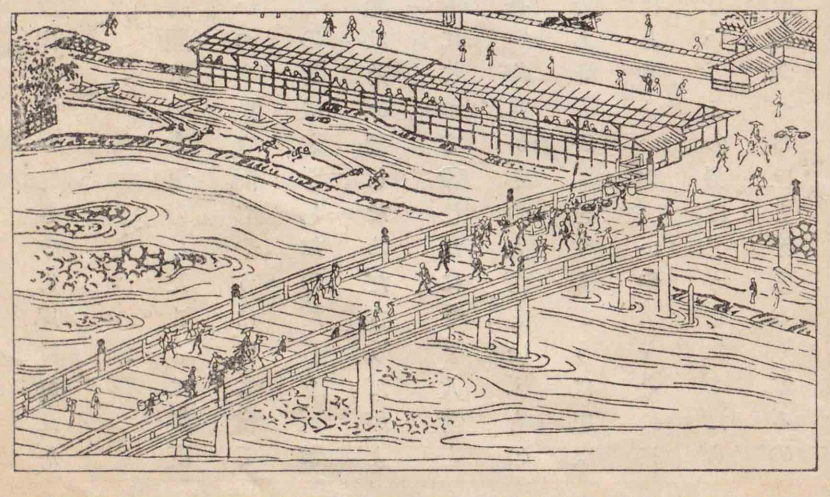
間に往々見受けるやうな溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。庄兵衞は不思議に思つた。そして舟に乘つてからも、單に役目の爲に見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の擧動に細かい注意を拂つてゐた。その日は暮方から風がやんで、空一面を蔽うた薄い雲が月の輪廓をかすませ、やう〳〵近寄つて來る夏の溫さが、兩岸の土からも、川床の土からも靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、加茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりと

高瀬川



して、只舳に裂かれる水のさゝやきを聞くのみである。夜舟で寢る事は罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰いで默つてゐる。その額は晴やかで、目には微なかゞやきがある。庄兵衞はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目をはなさずにゐる。そして不思議だ不思議だと心の內で繰返してゐる。それは喜助の顏が縱から見ても、横から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつ

（都名所圖繪）



たなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衞は心の中に思つた。これまでこの高瀨舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし乘せて行く罪人はいつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それにこの男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしやその弟が惡い奴で、それはどんな行掛りになつて殺したにせよ、人情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人情といふものが全く缺けてゐるほどの、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いや〳〵それにしては、何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。この男はどうしたのだらう。庄兵衞にとつては喜助の態度が、考へれば考へるほど分らなくなるの

である。暫くして庄兵衞は、こちらへ切れなくなつて呼びかけた。

「喜助。お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」

といつてあたりを見廻した喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衞の氣色を窺つた。庄兵衞は自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求める言ひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこでかういつた。

「いや、別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまで、この舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分いろ〳〵な身の上の人だつたが、どれもどれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て、一しよに舟に乘る親類のものと、夜どほし泣くにきまつてゐた。それにお前の樣子を見れば、どうも

島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにつこりわらつた。

「御深切におつしやつて下すつて、ありがたうございます。なるほど島へ往くといふことは、ほかの人には悲しいことでございませう。その心もちは私にも思ひ遣つて見ることが出來ます。しかしそれは、世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致して參つたやうな苦みは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の棲む所ではございますまい。わたくしはこれまで、どことといつて自分のゐて好い所といふものがございませんでした。こんどお上で島にゐろと仰しやつて下さいます。その

ゐろと仰しやる所に落着いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも有難い事でございます。それに私は、こんなにかよわい體ではございますが、ついぞ病氣をいたしたことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから今度島へお遣り下さるに付きまして、二百文の島目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」

かう言掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、島目二百文を遣はすといふのは當時の掟であつた。喜助は語を續いだ。

「お恥しい事を申上げなくてはなりませぬが、私は今日まで二百文といふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて仕事を尋ねて歩きました。それが見附かり次第骨を惜まずに働きました。そして貰つた錢はいつも右から左へ人

手に渡さなくてはなりませんでした。それも現金で物が買つて食べられる時は、私の工面の好い時で、大抵は借りた物を返して後を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。私はそればかりでもお上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、この二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文は私が使はずに持つてゐることが出來ます。お足を自分の物にして持つてゐるといふことは、私に取つては、これが始でございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出來るかわかりませんが、私はこの二百文を島でする仕事の元手にしようと樂んでをります。」

かういつて、喜助は口をつぐんだ。

庄兵衞は「うんさうかい。」とはいつたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これ

も暫く何もいふことが出來ずに、考へこんで默つてゐた。

二

庄兵衞はかねこれ初老に手の届く年になつてゐて、もう四人の子供がある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇といはれるほどの儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寢卷しか拵へぬくらゐにしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は、夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、豐な家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が滿足するほど手先を引締めて暮して行くことが出來ない。やゝもすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が、内證で里から金を持つて來て帳尻を合せる。それは夫が借財といふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衞は五節句

だといつては里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だといつては里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたのに氣が附いては好い顏はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々風波（爭）の起るのは是が原因である。庄兵衞は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ、人手（身の上）に渡してなくしてしまふといつた。いかにも哀な、氣の毒な境涯である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれほどの差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤（ソロバン）の桁（位取）が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄だにこつちはないのである。さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。そ

の心持は、こつちから察して遣ることが出來る。しかしいかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の欲のないこと、足ることを知つてゐることである。喜助は世間で仕事を見附けさへすれば、骨を惜まずに働いて、やうやう口を糊（くちすぎ）することの出來るだけで滿足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食物が、殆ど天から授けられるやうに働かずに得られるのに驚いて、生れてから始めての滿足を覺えたのである。庄兵衞はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のある事を知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るに、そこに滿足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役が御免になつたらどうしようといふ疑懼（心配）が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴塡を

したことなどがわかると、この疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。一體この懸隔はどうして生じて來るのだらう。只うはべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだといつてしまへばそれまでである。しかし、それは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうもない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衛は思つた。庄兵衛はたゞ漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、この病がなかつたらとおもふ。その日その日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらとおもふ。蓄があつても、又其の蓄がもつと多かつたらとおもふ。かやうに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏止ることが出來るものやらわからない。それを今目の前で踏止つて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は今更

のやうに驚異の目を見張つて喜助を見た。この時庄兵衛は、空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。

（鷗外全集）

永井荷風

名は壯吉といひ、明治十二年東京市小石川區に生れた。東京外國語學校を卒業した後、歐米に遊び、歸つてから多く小説に親んで今日に至つた。小説、隨筆に多くの作がある。

この文は氏がフランスのリヨン市にあつた時のこと

一　秋のちまた

フランスに來て初めて自分は、フランスの風土・氣候の如何に感覺的であるかを知つた。夏の明るさ、華やかさに引きかへて、秋が如何に悲しく如何

ミュッセ　フランスの抒情詩人、ユーゴーの門人（一八一〇―一八五七）

ドイツの大詩人、ファウストの作者、（一七四九―一八三二）

ベルリオ　フランスの音樂家、作曲家（一八〇三―一八六九）

ワグネル　ドイツの音樂家、作曲家（一八一三―一八八三）

に寂しいか。そしてその悲しさ寂しさは心の底ふかく感ずると云ふよりは、むしろ生きてゐる肉の上にしみ〴〵と、たとへば手で觸つて見ることが出來るやうな氣がするのである。

フランスの詩や音樂が、ドイツのものとは根本的に相違するのも、乃ち此處であらう。ミュッセを產んだフランスにゲーテは現れず、ベルリオを生じたフランスにワグネルは出ない。北歐の森の暗さは神祕を語るであらうが、然し南の方優しいフランスの自然が齎す悲哀の中には、云ひがたい美が含まれて居るので、人は其の悲哀によつて何物かを思ひ何物かを悟ると云ふよりは、直に悲哀といふ其の美に

アンジェロスの鐘の音　朝夕に聖母に祈りをあげる鐘の音

醉うて恍惚として了ふのである。

月は赤く星は蒼い夏の夜の浮れ歩き、露清く草匂ふ夏の朝を喜んで居る中に、何時となく朝夕の風が身にしみて來る。身體の中まで射通すかと思ふやうな明るい乾いた午後の日光は、氣の附かぬ中に自然と薄れ行き、時にはまるで燈の光のやうに黃色く見える事さへある。

夏のさかりには、八時九時近くまでも、云はれぬ薔薇色の黃昏に、天地はどんよりと醉つてゐるやうであつたのを、今は、寺々に鳴り響くアンジェロスの鐘の音を聞く頃には、光なく力なく老さらぼひたる秋の夕陽は沈みはてて、其の餘光を留むる空の色は、夏に比して夥しく紫がかり、霧とも靄と

もつかぬ薄い夕煙があたりを籠める。

かゝる時、市中の處々に設けてある廣い四辻――噴水や銅像や樹木のある廣い四辻に佇むと、家路を急ぐ人の影のみ際立つて黑く木の間に動き、空は一刻々々に暗くなりながら、まだ消えやらぬ悲しい黃昏の光に星は見えず、然し地上の燈火は早や初夜らしい光を放つて、樹の影をば黃ばみかけた芝生の上に投げてゐる。木の葉が一枚二枚と音もなく散つて行くのを、この新しい燈火の光に照して見るほど物哀れなものはない。

かゝる時、ローンの大河に幾筋となく架けられた長い石橋の袂に佇むと、河下、河上、眼の屆くかぎり引續く岸の人家も、

ローンの大河
フランスの南部を流れ地中海に入る

ローンの市と河

渦卷いて流れる廣い水の面も、丁度洗ひ晒した水彩畫の樣に一望漠然とかすみ渡つた濃い紺色の煙の中から、人家の灯、堤上の街燈が、點々として赤く朧ろにきらめいて居る。然し橋の上ばかりは、兩側の欄干に輝く電氣燈の光に急いで歩む男女の帽子が、風が畑の作物の葉を動かすやうに雪崩を打つて動く。一日の勞働、一日の事務を了つて家路をいそぐ此れ等の人の足音、馳過る電車や

カッフエー　珈琲店
ヂオロン　樂器、ヴヰオリン

荷車の響は、橋の下に鳴り轟く急流の聲と合して、今や都會は暮れて行く時の「生活」といふ苦痛の音樂を奏するのである。見れば石堤の下には洗濯を家業とする幾艘の屋根船、其の中では燈をつけながら腕まくりした幾多の女が、河水に布をば洗つて居る。かゝる時、商店引きつゞく繁華の大通を歩むと、此處は兩側の硝子戸に輝く燈の光に、空の明るい中から、もう夜らしい人の賑ひ。角々の料理屋では、植木鉢を置いた戸口から往來傍までテーブルを据ゑ並べ、明るい電燈の光の中をば、黒い衣服を着た給仕人が皿を持つて飛廻つて居ると、其處此處のカッフェーからはヂオロンの調や女の歌ふ聲が聞える有樣。涼しい秋の長夜の來るの

をば一刻も早くと待兼ねるらしいフランス街の黄昏時、これこそ他の國に行つては見られぬ處であらう。

かゝる時、町端れなる公園に行くと、如何にも寂然として立つて居る木立の間の瓦斯燈には火がつきながら、人は猶池のほとりや花の小路を散歩して居る。けれども夏の夕に聞くやうな花やかな笑ひ聲・話聲は聞えず、水のほとりに生えて居る蘆の葉に秋の風の戰ぐばかり。黄昏の光と燈の火影に、夜とも夕とも晝ともつかぬ一種幽暗な世界の中に音もなく歩いて居る白い女の衣服、水の上に眠つて居る白鳥の羽の色を眺めると、夕烟につゝまれた彼方の森の暗さに對して、云ひ知れぬ寂しい感じがするのである。水際の

柳がしきりに落葉する。星が水に映り出す。濕つた土の匂ひが一際高く感じ得られる……そして夜が蔽ひかゝるのである。

かくして日は一日々々と短くなり、早や十月も末近くなる……と、空は全く灰色にあせきつて、細い雨が降り出す。明けても暮れても雨である。雲は折々動いて青空が見え、時には薄い日の光の漏れる事もあるが、半時間一時間とたゝぬ中にまた降つて來る。眞青なローンの水は濁りに濁つて、今にも高い石堤を崩して溢れ出さうに漲り渡り、其の吠える水音は、夜更なぞには物凄く街中に響く。此の河下の南フランス一帯は、ガロンの河筋に、折々大洪水の出るのも

此の時節である。

もう何時日が暮れるとも氣が付かぬ。午前も午過もまるで夕暮同様に薄暗いからで、窓の少い室なぞでは、三時四時頃から燈をつけねばならぬ。よし雨は小止みして居ても、家中は戸外と同じやうに濕けきつて妙に肌寒い。いくら身支度をして居ても思はぬ時にくしやみが出て、鼻を啜るが否や、もう性の悪い風邪を思ふさま引込んで了つた様に身中がぞく〳〵する。

家もなく友達もない旅人には、こんなつらい天氣は恐らくあるまい。散歩と云つても、かういふ天氣では、公園や町はづれにも出られぬので、傘を手にしたまゝ雨の晴れ間晴れ

間に、見馴れた市中、歩みなれた往來を歩くより仕様がない。雨に濡れた楓樹の落葉狼藉たる河岸通りや、石像もしくは記念碑の周圍の花園に、草花の枯れ萎んだ廣場の眺めは、さながら、何か市中に大騒動でもあつた後のやうな云はれぬ深い荒寥の感を與へる。で、一度かう云ふ本通から曲りくねつた横町や路地裏に入ると、寂しい四邊のさまは一層深く身に逼るのである。

鼠色した古い塗壁の人家は、雨に濡れたまゝ灰色の空の下に蹲踞つて居て、其の窓々は盲人の眼のやうに何の活氣も何の人氣もない。かういふ横町には、嘗てお客の入つた事のない様な荒物屋だの古時計屋なぞ云ふ小店があるが、其

の眞暗な燈を點さぬ店の中には、必ずリューマチスで手の動かぬ様な老婆がチョコンと張番をして居る。人通りと云つては、折々身なりの見すぼらしい女が、洗濯物なぞを入れた手籠を片腕に引掛けて裏通りへと早足に拔道をするばかり。日光のとゞかぬ其の邊の戸口々々をば、痩せた犬の群がうろ〳〵して居る中に、けたゝましい聲を出して嚙合ふ……が、その鳴聲も、嚙まれ

た犬の逃げ行くと共に再び元のやうに寂然となつてしまふ。すると一時小止みして居た寒い時雨がはら〳〵と降り出す。それにも關はらず、かう云ふ裏街、車や馬の危險のない裏町ばかりをさまよふ盲目の音樂者が、何處からともなく歩み出て、音のわるいギオロンの調に、暮れ行く四邊の寂しさに又一層の哀れを添へしめる……。

自分は何時でも有合ふ小錢を衣嚢からつかみ出して、投捨ててやるが否や、急いで明い大通りへ駈出すのだ。早く黄昏が過ぎ去つて燈火の輝く夜になつてくれゝばよいと、それればかり思ひ詰めて家へ歸るのである。寧そ夜になつたならば、薄暗い夕方よりも幾分か氣が變るであらう。晩餐

バルコン
露臺
ヴェルレーン
フランスの象徵詩人（一八四四—一八九六）

に葡萄酒でも飲んだら、少しは心が浮立つであらうと思ふからで。

然し、連日の秋雨に腐り果てた心は、夜が來ようとも、酒に醉はうとも、如何して浮立つ力があらう。狹い室の机の上の燈火は、幾ら心を拈り出しても妙に薄暗く見えるし、醉つた心は却つて思はずともの事ばかりを思ひ返す。

かういふ晩である——バルコンに滴る雨の音がわけもなく人を泣かせるのは。ヴェルレーンの詩に、

巷に雨の濺ぐが如く
わが心にも雨が降る
如何なれば

かゝる悲みのわが心の中には進み入りし
地に響き屋根に音する蕭條(シヨウセウ)なる雨の音よ
雨の調よ
わが心は何が故に憂ふるとも知らず
たゞ譯もなく潤ふ
譯もなく悲む悲みこそ
悲みの極みと云ふのであらう
憎むでもなく
愛するからでもなくて
わが心には無量の悲みが宿る
と云ふやうな意味が歌はれてある。

自分は窓の硝子戸から雨の街を見下して、秋――雨――夜――燈――旅――肌寒――とこんな名詞をば、フランス語で調子をつけて口の中に繰返した事がある。自分ばかりにはその時、それが何だか意味の深い詩になつて居るやうな氣がしたからで。

一夜大風が吹いた。並木道から、四辻から、河岸通から、市中の樹木はすつかり落葉して了つて、その朝、街は非常に明るくなつたやうに思はれた。見れば、空は青く晴れて日が照つて居る。道行く人の鼻の息が眞白く見える。冬が來たのだ。

すると滅入つた心は滅入つたなりに、もう何うやら落着い

て了つたらしく思はれた。何故なれば、自分は人と同じやうに、時には笑つて、暖爐の側のランプの下で冬の遊び事の話をする様になつたから。然し、自分は決して春の樂しさ夏の明るさを忘れたのではない。冬の寒さを喜ぶのでもない。さらば過ぎた時雨の夜の悲みは何うしたのであらう。自分はかう思つた――一時は死なうと思ふ程の絶望を感じた人も、やがては其の絶望にも馴れて了つて、諦めがつき、追々に忘れて了ひ、そして遂に年を取つて了ふのもやはりこんなものであらう。

（ふらんす物語）

佐藤春夫

明治二十五年和歌山縣新宮町に生れた。散文、詩、小説等の作が多い。

一　故國晩秋の歌

ふる里の
あはれなる
人ありて
しらぎくの
あれまさる
人ゆかぬ
釣鐘の

ふりたる家の
秋のまがきは
むかし植ゑにし
さかりすぎたり
桑のはたけは
畦のかたみち
花かれにけり

古井戸の
人知らぬ
うつぶせに
ひとりたゞ
とほくゆく
うつゝなる
あはれみて
山ちかみ

反歌

ふるさとのふりたる家の庭にして
晝鳴く蟲をきけばかそけし

石だたみには
鷄頭の花
たふれさくなり
園をめぐりて
雲をねぎらひ
秋の胡蝶を
わがたゝずめば
くるゝ日はやし

高山樗牛

名は林次郎といひ、明治四年山形縣鶴岡町に生れた。東京帝國大學文科卒業後、雜誌記者となつて評論に筆をとつたが、後に東京帝國大學文科及早稲田大學に教授した。文學博士。美學、評論、史傳等の著が多い。明治三十五年歿、年三十二。

一　清見寺の鐘聲

夜半のねざめに鐘の音ひゞきぬ。おもへばわれは清見寺のふもとにさすらへる身ぞ。ゆかしの鐘の音や。
この鐘きかむとて、われ六とせの春秋をあだにくらしき。
うれたくもたのしき、今のわが身かな。いざやおもひのまに聽きあかむ。

秋深うして萬山きばみ落つ。枕をそばだつれば野に悲しき聲す。あはれ鐘の音、わづらひの胸にもの思へとや。この世ならぬひゞきをわれいかにきくべき。怪しきかな、物おもふとしもあらなくに、いつしかわが頰に涙ながれぬ。間どほなる鐘の音はそのはじめの響を終りぬ。われは枕によりて消ゆるひゞきのゆくへもしらず思ひ入りぬ。第二の鐘聲起りぬ。夜はいよ〳〵しめやかにして、ひゞきはいよ〳〵冴えたり。山をかすめ海をわたり、一たびは高く、一たびは低く、絶えむとしてまたつゞき、沈まむとしてはまたうかぶ。天地の律呂か、自然の呼吸か、隱としていためるところあるが如し。想へばわづらひはわが上のみには

三保の入江 三保松原の長洲の抱く灣で、清水灣がある

有渡の山 久能山をいふ、靜岡縣安倍郡の海濱にある

袖師 同庵原郡、江尻町の北、袖師村の海岸

清水 靜岡市の東八粁、三保の浦の西岸にある

清見潟

あらざりけるよ。あやしきかな、わが胸は鐘のひゞきと共にあへぐが如く波うちぬ。

おもひにたへで、われは戸をおしあけて磯ちかく歩みよりぬ。十日あまりの月あかき夜半なりき。三保の入江にけぶり立ち、有渡の山かげおぼろにして見えわかず、袖師・清水の長汀夢の如くかすみたり。世にもうるはしきけしきかな。われは

清見潟
興津の海をいふ

磯邊の石に打ちよりて、こしかた遠く思ひかへしぬ。おもへば、はや六歳のむかしとはなりぬ。われ身にわづらひありて、しばらく此地に客たりき。清見寺の鐘の音に送り迎へられし夕べあしたの幾そたび、三保の松原になきあかしし月あかき一夜は、げに見はてぬ夢の恨めしきふし多かりき。

六とせは流水の如く去りて、人は春ごとに老いぬ。清見潟の風光むかしながらにして幾度となく夜半の夢に入れど、身世忽忙として俄に風騒の客たり難し。われ常にこれを恨みとしき。

この恨み、果さるべき日は遂に來りぬ。こぞの秋、われ思はず病にかゝりて東海のほとりにさすらひ、こゝに身を清見潟の山水に寄せて、晴夜の鐘に多年のおもひをのべんとす。あゝ思ひきや、西土はるかに往くべかりし身の、こゝに病軀を故山にとゞめて山河の契りをはたさんとは。奇しくもあざなはれたるわが運命かな。

鐘の音はわがおもひを追うて幾たびかひゞきぬ。

うるはしきかな、山や、水や、僞りなく、そねみなく、憎みなく、爭ひなし。人は生死のちまたに迷ひ、世は興亡のわだちを廻る。山や、水や、かはるところなきなり。おもへば恥かしきわが身かな。こゝに恨みある身の病を養へばとて、千年の齡もとより保つべくもあらず、やがて哀れは夢のたゞちに

西土云々
作者は官命によつて海外留學の途に就かうとして病んだ

消えて知る人もなき枯骨となりはてなんず。われは薄倖兒、數ならぬ身の世にながらへてまた何の爲すところぞ。さるに、をしむまじき命のなほ捨てがてに、こ漂浪の日暮をかさぬるこそ、おろかにもまた哀れならずや。鐘の音はまたいくたびかひゞきわたりぬ。わがおもひいよ〳〵深うなりつ。

樗牛筆蹟

離別に臨て我妹に餞せる歌三首

想ひ見る夢のまくらも淋しかふ里の秋はぎ
の花加勢を命の桐の一葉を
わかれてのちの涙を想ひやれば月の影さへくもりてぞ見ゆ

夜はいたく更けぬ。山と水と寂寞として地に横たはり、星と月と寂寞として天にかゝれり。うるはしの極みかな。願はくは月よ傾かざれ、星よ沈まざれ、永久の夜の、この世の聲色を掩ひつゝめよかし。されどわれには禱るべき言葉なかりき。

最後の鐘聲おこりぬ。餘音とほくわたりて、到るところに咏嘆のひゞきをとゞめぬ。うれしの鐘の音や、人間の言の葉に上りがたきわがいくそのおもひ、この鐘ならで誰か言ひとかむ。

年を越えてわれ都にかへりぬ。わが思ひまた胸にむすぼれつ。夜半のねざめに清見寺の鐘聲またきくべからず。

われは今に於ても幾たびか思ひぬ。噫一語以てわがこの思ひを言ひあらはさんすべもがな。かくて月あかき一夜、海風に向ひて長く嘯かなんわが胸のいかばかり輕かるべき。

（樗牛全集）

徳富蘇峰

名は猪一郎といひ、文久三年熊本に生れた。同志社に學んで後、東京に出て國民新聞を創刊して永く社長であつた。貴族院議員。評論、歴史の著が多いし、文章家として名高い。

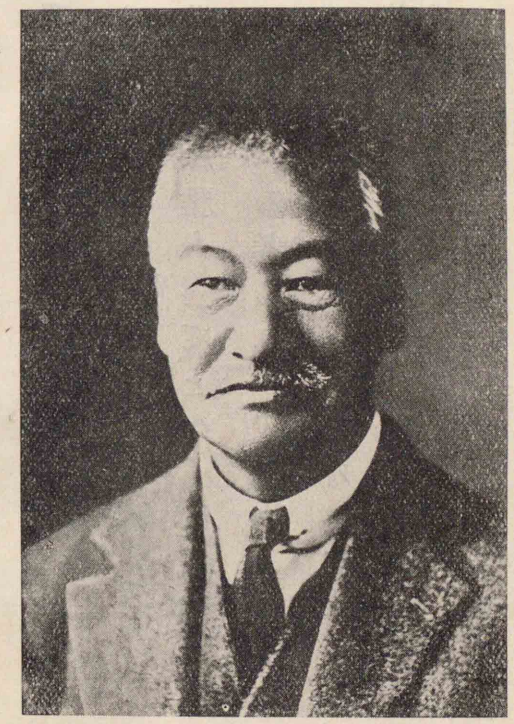
一　風雅論

唯かりそめの旅の空に、同じ汽車の窓より彼方に聳ゆる山

山の景色を眺めたるのみにても、風雅の感有る人と無き人とは、自ら其の興味を感ずる度を異にすべし。嗚呼、此の風雅の嗜こそ、何人にもあり得べくして、又何人にもありたきものなれ。

世には風雅人とて、とかくに風雅といふことをば我が物とのみ思へる者あり。我が物と爲すは妨げずと雖も、之を我が專有物となさんとするに至りては、大いに不可なり。彼の世を避け、俗を脫して、山林に幽居し、花鳥風月をのみ友とする者、若しくは詩歌・書畫・茶の湯・挿花・音樂の技藝に長じ、又は其等の鑑識に長じたるものの如き、此等はもとより世の所謂風雅人たるべき特權を有するものならん。しかも風

雅の全權を專有し得べきものにはあらず。否、風雅の嗜は何人にもあり得べきものなり。



徳富蘇峰

凡そ其の境遇の如何に關せず、其の修養の多寡に係らず、すべていかなる人といへども、其の優美の心を以て宇宙と人とに接する時は、そこにいひ難き風雅の趣味を感得することを得べし。而して風雅の嗜は、恒に此の心を存して失ふことなからん

ことを努むるによりて生ず。されば風雅は、必ずしも萬卷の書を讀破り、天地神人を究めたる學者にのみ存するにあらず。彼の眼に一丁字なき田夫野人と雖も、田畝の間に立ちて、春霞のたなびくひまより、遠山の端の夢の如く横たはれるを見て、いひ難き快感を其の胸裏に思ひ浮べたる刹那に於ては、乃ち亦風雅の人たるなり。

風雅は又必ずしも櫻かざして遊ぶ大宮人にのみ存するにはあらず。彼の心なき賤の草刈といへども、其の背負へる草束の間に一朶の花を挿みて、心融々として勞苦を忘れたる瞬間に於ては、乃ち亦風雅の人たるなり。唯そこに必要なるは、此の心を恒に存して失はざらんことを努むべきと、

之を練磨修養して愈、其の眞醇に近からしむべきとの心掛のみ。

風雅は必ずしも外物に存せず。終生身を珍畫・名器の裏に置けども、遂に風雅の眞味を解すること能はざる者あり。必ずしも又技藝に存せず。世には、詩人といはれ、畫師と呼ばれ、音樂者と稱へられて、却つて眞の俗物なる者あり。人もし風雅の嗜あらば、其の境遇や、技藝や、もとより之を助くるに於て大なるべしと雖も、しかも單に此等のみによりて、風雅は卽ちこゝに在りと斷言すべきものにあらず。彼の生田の森の激戰に、梅花を箙に挿みて自ら標識したる梶原景季を見よ。風雅の風雅たる、それこゝに在らん。

生田の森　攝津の國一ノ谷に平家が據つた時の東口

梶原景季　景時の子、後に父と共に駿河國狐崎に敗死した、年三十九

風雅の嗜は人の一生をして興味多からしむ。仰いで浮雲の白きを看、俯して百花の紅なるを觀れば、吾人は頓に自己を天地の懷裡に投ずる感あり。一片の明月は、何人といへども、よく之をながむることを得べく、また富者と貧者とを差別せざるなり。風雅は貴族的にもあり。しかも最も多く平民的に存す。而して吾等は此の風雅の嗜を、平民社會に普及せしむることの、世道人心を正す上に於て最も必要なるを見る。

風雅の嗜あるものは自ら餘裕あり。かゝる人は議會討論の場中に於ても、尙よく襟に挿める薔薇の花を愛する事を解せり。風雅の嗜ある者は自ら氣品あり。何となれば、利

害得失の外に心目を快暢ならしむる天地を有すればなり。風雅の嗜ある者は、いかなる場合にも樂みあり。何となれば、現在の齷齪たる社會の裡にありて、よく宇宙と人との美を我が心に吸收する事を得ればなり。風雅の嗜ある者は、又よく自ら容忍することを得。何となれば、其の暗黒なる一面を見ると共に、必ず他の光明なる一面を見ればなり。

蓮月尼の歌にいはく、

宿かさぬ人のつらさを情にて
おぼろ月夜の花の下ぶし

と。若しかくの如く觀じ來らば、人生何に處してか自得せざらん。

蓮月尼 太田垣蓮月、京都の歌人、明治八年歿、年八十五

今戸燒 東京市淺草區今戸町で江戸時代から產した陶器

世には千金を投じて茶碗を購ひ、萬金を拋ちて書畫を求めて、風流こゝにありと誇る者あり。若し其の人にして眞に風流を解し、且力よく之を致すに餘りあらば、我等は敢て之を斥けじ。然れども其の人にして、徒に器物の末に志を勞して、單に其の多きを貪り、其の奇を誇らんとならば、吾等は之を指して玩物喪志の徒といはんのみ。豈許すに風雅を以てすることを得んや。之に反して、廢屋破窓のうち、新聞の挿畫を壁に挿み、今戸燒の茶碗にて澁茶を喫する人と雖も、其の心よくこゝに存せば、これ實に大なる風雅なるべきにあらずや。

（第二日曜講壇）

二　國民的自力主義

日本帝國の運命は、日本國民の自力に據りて支持せられ、繼續せられて開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃む外に方便も手段もあらざればなり。よし千百の方便・手段ありとするも、その自力主義踐行の後に於て、始めて其の效用を見るべければなり。

然りと雖も、吾人の所謂自力主義は、決して自滿主義にあらず、自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや。排外主義をや。吾人は我が短を補ふべく、世界の總べての長を採らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と歩調を一にせざるべからず。而もこれ唯内に自ら主

持する所ありて、而して後、外に向つて之を求むべきのみ。吾人は、我が國民が精神的に獨立し、而して後世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞや。日本國民は日本國民として、其の獨特の立脚地に於て内外一切の經綸を定むることこれなり。東洋のドイツにあらず、東洋の英・米にあらず、日本は東洋の日本としてなり、日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自ら我が國民的見地に據りて裁斷を下すにあるのみ。此の如く、内既に支持する所あり、乃ち外に向つてその益を求む、必ずしも英・米と云はず、必ずしも、獨・佛と云はず、世界の長は皆採りて以て我が有と爲すべし。復何をか顧慮し、何をか遲

疑せんや。

惟ふに、我が國當今の憂は、第一、國民の惰氣滿々たることなり。別言すれば、國民猛志を消磨し、小成に安んずるにあり。曰く、「日本は既に五大國の一に位せり」曰く、「日本は既に東洋の盟主たり」曰く「日本は既に富强なり」と。而して更に磨礪自彊し、此の國運を進一轉せしむることを閑却しつゝあるなり。

第二、世界の大勢を根本的に謬解したるにあり。曰く、「世界は泰平なり。今後は戰爭らしき戰爭は絶無なるべし。國際的葛藤は、聯盟によりて自動的に按排せらるべし」と。彼等は其の待つあるを恃まず、其の來るなきを恃み、其の恃むべきを恃まず、恃むべからざるを恃むなり。

待つあるを恃まず

用レ兵之法、無レ恃ニ其不レ來、恃ニ吾有ニ以待一也。無レ恃ニ其不レ攻、恃ニ吾有ニ所不レ可レ攻也。（孫子、九變）

第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも多くの者より排斥せられつゝあり。是必ずしも日本國民の罪とのみ謂ふべからず。而も其の原因はいづくにあるにもせよ、事實は正しく此の如し。而して我が國民は、此の如き不愉快なる事實を正視し、認識し、之に處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。

第四、我が國民は物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことを勗めず、進んで世界に向つて自國の眞相を闡明し、世界の誤解を正すことを努めず、唯その日暮しに一時の苟安を倫取し

つゝあるは何ぞや。

第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。如何に世界の迫害を被るとも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、何をか懼れ、何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるにあらずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。

アングロサクソン民族
英米の民族

蓋し、吾人が自力主義なるものは、内に國民の道義的自信力を扶植し、先づ自ら不敗の地位を占め、而して後、徐ろに外に向つて我が志を行ふにあるのみ。此の如くして世界と協調を保つべく、此の如くして東洋の盟主たるべく、此の如くしてアングロサクソン民族と角逐して世界の文明に貢獻

し、大和民族の天職を全うするを得べきのみ。今日の如く、我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら頼まずして他を頼み、放恣、怠慢、強ひて自ら欺いて眼前を糊塗し去らんとし、此の如くして止むなくんば、我が帝國は精神的に死亡するなり。世界の歴史は進歩の歴史なり、改善の歴史なり、向上の歴史なり。吾人は如何に一方に痛楚號泣するが如き現象を見るも、他方には光明と平和との到來を疑ふ能はざるなり。但し之を果さんが爲には、非常なる危險、非常なる艱難、非常なる苦痛を經ざるべからず。即ち今や吾人は此の一大試煉の時期に遭遇するものなり。當面の問題は我が日本國民が果して之に及第するか否かに在るのみ。

嘉永・安政の際に於て、我が日本は全く内憂外患の危機に擠されたりき。而も我が先人は種々の失敗過誤を累ねたるに拘らず、遂に之を排除して維新中興の新局面を打開せり。顧ふに明治半百年に亙れる國運の增進は、固より明治天皇聖德の致す所なるも、亦嘉永・安政より元治・慶應に至る國歩の艱難によりて之を培養したるものと云はざるを得ず。人は艱難に活きて安逸に死す。國も亦然り。英・佛兩國の現時に於て再生復活しつゝある所以、亦固より大戰の大試煉を經來りたるが爲のみ。吾人は之を我が國の過去に徵し、之を英・佛諸國の現在に徵し、我が帝國の前途に横たはる無數の危殆困難を豫想して、毫も自ら失望落膽せず。若し

然るべき理由あらば、そは無數の危殆困難そのものにあらず、寧ろこれに氣付かず、空々寂々、悠々緩々として、苟且偷安を事とする我が國民的精神の潰破これのみ。

我が國民が自ら冒進するにせよ、はた回避するにせよ、何れにしても我が國民的一大試練の時期は既に到來しつゝあるなり。此の上の問題は、果して國民的一大決心・一大努力・一大奮鬪もて之に打克たるべきかにあり。吾人は先づ我が國民が、國運の消長興廢の十字街頭に立つことを自覺せんことを望む。次に此の國家的一大危機に向つて勇進し、潔く此の一大試煉に及第せんことを望む。而もこれ決して容易の業にあらざるなり。吾人日本國民は、何れも國家

的に大死一番して、而して後其の再生復活を期せざる可からず。如何に國家の難局を逃避するも、來る可きものは遂に來らざるを得ざるなり。吾人は寧ろ今日に於て之を覺悟し、鐵石の心腸もて之に當る決心なかるべからず。輕々しく其の趾を擧ぐる勿れ、漫に其の腕を扼する勿れ。忍ぶべきは忍べ、耐ふべきは耐へよ。只我が大和民族たるものは世界公論の容す所に據り、天下の大道を行ひ、國際共通の正義を旨とし、以て我が所信を遂げよ。吾人は我が力を恃むとともに、我が正義を恃みとす。此の如くして與國の我を扶くるあらば、與國と共にすべし。苟も與國なくんば、我躬ら往くべき道を往かんのみ。

吾人は決して外患を恐れざるなり。若し眞に畏るる可きものあらば、そは內憂にあり。內憂の中殊に畏るる可きは國民的志趣の消磨にあり。知らず、我が國民は、大死一番以て自ら新生命を贏ち得る覺悟あるか。活裡死あり、死中活あり。生を欲する者は死、死を敢へてするものは生。國家の前途を解決すべき秘機は只此の死生の二字中にあり。

（大戰後の世界と日本）

昭和副讀本

巻三

終

No.

好乃魚の頭

あはれ
秋かぜよ
情あらば傳へよ
――男ありて
夕餉にむかう
さんまを食ひて
思ひにふけると
さんま さんま
そが上に青き蜜柑の酸をしたたらせて
さんまを食ふ男がふる里ならん
なり
そのなりひをちやしみなつかしみを女は
いくたびか青き蜜柑をもぎ来たり夕餉にむかひ
けむ
あはれ 人に捨てられんとする人妻と
妻とそむかれなる男と食ひさまたげかの
愛ふかき炉を焚ちし女のこは
小さき箸をあやつりなやみつ
父なるや男にさんまの腸をくれむと言ふに
あらずやわ
あはれ
秋かぜよ
せこそはれつらめ
思ひやりなるあかの風樂を
しるべに
秋風よ。

いとせうそ
謹せよ かの一ときの風樂ゆめ二度とかへらじと

あはれ
秋風よ
情あらば傳へよ
妻とさうぎうし
夫にさらばせし幼児と
父を生はぐくみし
――男ありて
夕餉にむかう
さんまをくひて
涙をたらすを
さんま さんま
さんま苦いか 塩つぱいか
その上に熱き涙をしたらせて
さんまを食ひはりづとの里のなりひぞや
あはれ
げにはそは何はまはしくなつかし

永井荷風、壮吉、金阜、又号南の号のある明治十二年十二月十五日金富町に生れた父、久一郎、本名と号した、尾張の人で漢籍洋学に通じ詩をよくした、日本郵船会社員であった

（幾内者、畫洋を学んだ）

当時横浜市中学を出て上海に渡び、帰って外務省支那語を修むること三年で廃学明治三十五年

九月、米国に留学し、後正金銀行伯斯支店及リヨン市支店に勤めたが明治十一年八月帰朝した

四十三年、慶應の文学科へ移ったが病により辞し爾後執筆に つとめた

「荷風」主に随筆と小説、荷風全集六冊とある、地獄の花、あめりか物語、ふらんす物語、冷笑、すみだ川、牡丹の宴、紅茶の後、新橋夜話、珊瑚集、散柳窓夕栄、日和下駄、断腸亭雑筆

ありの無等

「荷風」日本の新文壇に自然主義の勢が盛んで来た時、そこに新浪漫主義が入って来た。

先生は都会に生れ、洗練した趣味と頽廃した気分とを有つたものは、如実に唯美的

享楽的の傾向を有してゐたが、永井荷風氏のものはあくまでも伝統的に受け継ぐ

作家である。従つてその作品に唯美主義的享楽主義的の色彩の鮮かなのは当然で

あつた。その作品はフランスから帰つてからで夫いつフランス的であると共に江戸情緒的で然も

文那趣味をゆたかに蔵してゐた

昭和副讀本

卷三

終

昭和副讀本

卷三 終

昭和

野口米次郎

生涯、明治八年十二月横浜に生れ、慶應義塾を出て渡米、米詩人ミニアーニついで英詩をあび、三年ノ間その名ようやく盛名を得た。昭和ちょうど作品

日本主義ようやくの二重国籍者の詩人、野口米次郎はバックレット牧師とゴッホである。

英文系、表現は新、思想は新しくなく、日本趣味、日本伝統を重じたものが多い。

また古美術を愛したものか、行文多くは感情豊

詩人の文を思わせる。また五七調、賛美歌多い。

松の木、

松の木の日本人の心臓にある文学の一節

○日本趣味論、日本美術論、夢の想念が表はれてゐる

松の木に象徴された日本の趣味をうまく文に描かうとしてゐる日本の松の情趣

ひろい本傳統趣味の一表現

昭和副讀本 巻三 終

昭和副讀本

卷三終

昭和五年九月二十一日印刷
昭和五年九月二十五日發行
昭和六年一月二十四日修正印刷
昭和六年一月二十七日修正發行

昭和副讀本全五冊

卷數	定價	昭和六年度臨時定價
卷一	金參拾五錢	金五拾五錢
卷二	金參拾參錢	金五拾貳錢
卷三	金參拾五錢	金五拾五錢
卷四	金參拾錢	金四拾七錢
卷五	金參拾錢	金四拾七錢

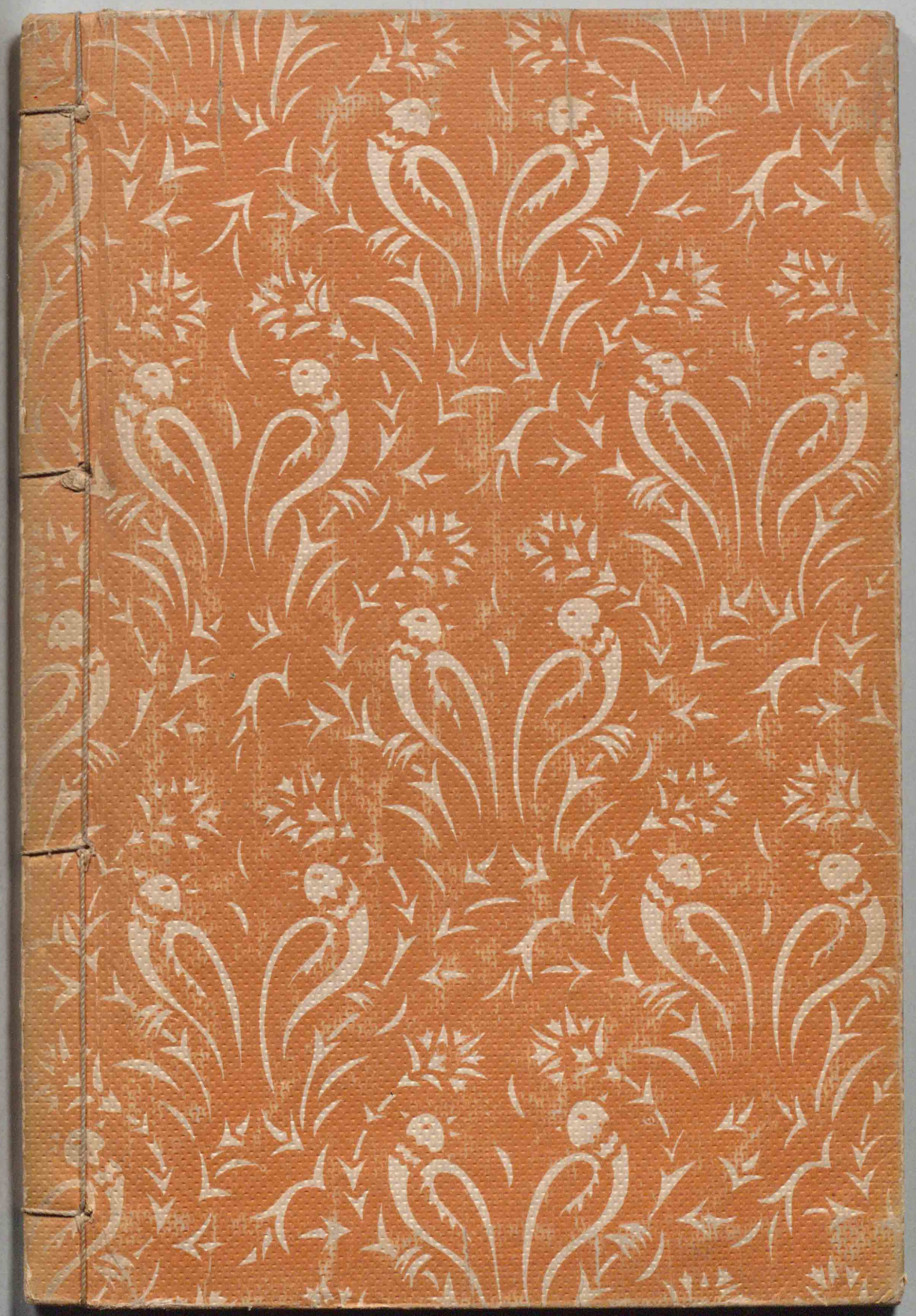
著作者　東京市外中野町字大塚一六二五番地　保科孝一

發行者　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院　右代表者　倉田八十八

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十七番地　白井赫太郎

印刷所　精興社

發行所　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院
振替口座(東京)七四二番

發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番　目黑書店

著作權所有